主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2024 graph magazine vol. 64

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 64 定価100円（税込み）


Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる
主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

4 イエス様の証し(1)　ゴットホルド・ベック

13 わたしは、よみがえりです。いのちです　滝 泰治

6人の証し

23 主の祝福　平野 恭子

36 鷲のように翼をかって　池永 久一

44 道しるべはイエス様　吉村 曜子

53 祈れば与えられる最高の恵み　井上 裕之

63 イエス様との私の歩み　ウィリアム・ジャクソン
付録：My Life was walk with Jesus Christ(「イエス様との私の歩み」原文)

76 神の愛とあわれみ　ジャクソン・加奈子

メッセージ

83 主イエス様のなさったこと　ゴットホルド・ベック

イエス様の証し（1）

ゴットホルド・ベック

そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

（ヨハネ　10・7～11）

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。

（ヨハネ　10・17、18）

信じる者の使命とは、イエス様を紹介することです。「あなたがたはわたしの証し人となる」とイエス様は弟子たちに言われました。その時、弟子たちにとってそのようなことは考えられなかったのです。彼らはみじめなままでした。弟子と呼ばれてはいたのですが、ほんとうの意味で弟子になっていなかったのです。五旬節の日、約束の聖霊に満たされてから、はじめて彼らは真の意味で弟子となり、主に用いられる者となりました。

ここに二人の兄姉の証しを紹介いたします。一人目は九十歳の方です。「主の聖名を賛美します。今、私は元気です。けれどもいつ召されるか分からないので、皆さんに最後のことばを残していきたいと思います。私の今の気持ちは、詩篇23篇の『たとい死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから』という通りです。また『私の杯は、あふれています』というみことばは、なんと嬉しいことでしょう。私でさえもそのように言えるよう導いてくださったのは、イエス様です。ありがたいことです。イエス様がいつも共にいてくださるその人生は、なんと素晴らしいことでしょうか。私はその喜びと、平安と、希望で、満たされています。ですから今、何の心配もありません。思い煩いがありません。『私は、いつまでも、主の家に住まいましょう』。イエス様に心から感謝いたしております。」

次はとても若い六歳の女の子の証しです。「聖書をありがとうございました。大事に使います。私はイエス様が大好きです。困ったり、悩んだりしたときに、いつもイエス様にお祈りしています。イエス様大好きです」。

証しするとは、このように、イエス様を紹介することです。そして聖書が私たちに呼びかけていることは、「イエス様から目を離さないでいなさい。目を離すとすぐ悩むようになります。」というものです。

人間はご存じのように、みな簡単に惑わされます。いわゆる人間によって作られた「宗教」に入った人々は、みな例外なく騙されています。

しかし聖書が証ししているイエス様は違います。ありがたいお方で要求する方ではありません。与えてくださるお方です。もちろん、言うことと実際が違っている偽物ではなく、本物を与えるお方です。また、人生に迷う人々を導くお方です。イエス様は人間を教え、満た

したいのです。

本物の主イエス様とは、罪を明るみに出すお方ですが、明るみに出された罪は赦してくださり、忘れてくださいます。本物のイエス様とは、罪人に近づいてきてくださり、聞く耳を持ち、答えてくださるお方です。このイエス様を仰ぎ見るとき、その結果として礼拝せざるを得なくなるのではないでしょうか。

人間の語る証しも確かに大切です。けれどもイエス様ご自身の証しを聞くことも大切ではないでしょうか。ヨハネの福音書10章にはイエス様ご自身の証しが記されています。イエス様はここで三つの事実について語ってくださいました。第一に、「わたしは良い牧者です」。そして、「わたしは雇い人ではなく、偽物ではない。わたしは本物である」。二番目に「わたしは門です」。そして「わたしは盗人ではなく、嘘つきではない」。三番目に、「わたしは父の息子である。わたしは父なる神を冒涜する者ではない」と証しされています。それでは順に聖書を見てみましょう。

1. わたしは良い牧者です

イエス様は「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ10・11)と証ししてくださいました。羊のためにいのちを捨てることができるのは、イエス様が雇人ではなく、本物の羊飼いだからです。イエス様は唯一の良い牧者であるという証しによって、ご自分が旧約聖書でその出現を約束された者である、ということを明言されたのです。

イスラエルの民は次のことを熟知していました。すなわち、約束された来たるべき救い主は、自分を無にして迷える羊のことを心の底から心配してくださる良い羊飼いであることを。

ダビデは生きて働かれる神を体験しました。彼は、自分の罪が徹底的に明らかにされたことによって、またそれと同時に彼の債務(罪)が赦されたことによって、「主こそ私の羊飼い」と喜びの声をあげることができたのです。「私の救い主は、生ける真の救いをもたらすお方である」と言えたのです。詩篇23篇(ダビデの賛歌)は、人々から最も愛される詩篇の一つですが、実際は聖書の中で他のみことばほどは、信じられることの少ないみことばであると言えましょう。「主は私の羊飼い」(詩篇23・1)。そして主は私の羊飼いですから、「私は、乏しいことがありません」。一体だれがこのことを本当に信じているのでしょうか。私たちは困った時に、心からこのみことばを信じることができるのでしょうか。「主は私の羊飼い」と語り証しする者は、それによって同時に、「私は助けのない、愚かで、無力な羊です」ということも言い表し証ししているのです。自分自身のみじめさをよく知っている者は、良い羊飼いのところに来て、すべてをその羊飼いにゆだねます。

詩篇の作者アサフもまた次のように書いたのです。

イスラエルの牧者よ。聞いてください。ヨセフを羊の群れのように導かれる方よ。光を放ってください。ケルビムの上の御座に着いておられる方よ。(詩篇　80・1)

「イスラエルの牧者」とは主なる神ご自身です。この牧者は自分に属する者を見守っていてくださるお方です。イザヤ書の中にも、似たことばがあります。

主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。　(イザヤ　40・11)

これは来るべき救い主、メシヤについての約束です。そしてこの約束のみことばはイエス様を通して成就されました。

ユダヤ人たちは、旧約聖書の内容を熟知していました。そして彼らは良い牧者について、どれほど多くの約束がなされているかを、もちろん知っていました。そしてまさにイエス様が、突然、彼らの真ん中に立たれ、「わ

イエス様の証し(1)

たしこそ良い羊飼いである」とみことばによって、ご自分が約束された救い主であることを明らかにしてくださったのです。

イエス様は、他の、自分こそは約束された救い主(メシヤ)である、と自称する多くの者たちとは対立します。彼らは門から入らないで他の所を乗り越えて来る、旧約聖書に預言されたのではない悪い牧者だったのです。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。」(ヨハネ10・1)とあります。

旧約聖書の約束は悪い牧者によっては実現されませんでした。彼らは主の羊たちを探し求めないで、自分自身を養ったのです。エゼキエル書34章8節後半を見ましょう。「わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって牧者たちは自分自身を養い、わたしの羊を養わない。」とあります。良い牧者は、徹頭徹尾(てっとうてつび)自分を無にして、羊たちの世話をすることだけを考えます。悪い牧者は自分のことしか考えず、羊たちの世話のために配慮することをしません。まことの牧者は寄り添うお方であり、与えるお方です。

イエス様はまず第一に、ご自分が良い羊飼いであること、雇い人ではなく本物であり偽物ではないことを証しされました。

2. わたしは門です

二番目に、「わたしは門です」(ヨハネ10・9)と証しされました。「わたしは盗人ではなく、嘘つきではない」と言われました。盗人は盗むため、また殺すためにやって来ますが、しかし、イエス様は守るため、力づけるために来られます。

その当時の羊飼いは夜になると、すべての羊を一つの囲いの中に追いやりますが、囲いには門がありませんでした。それで一体、羊たちは門のない囲いの中にとどまるでしょうか。門がないのは、羊たちにとって危険なのではないでしょうか。猛獣が囲いに入って来ようとしたら、どうなるのでしょうか。

羊飼いはその心配に対して、微笑(ほほえ)みながら答えるでしょう。「わたしこそ、門です。羊飼いは夜になると、囲いの入口のところに横たわって寝るのです。ですから、その囲いを出ようとしても羊はもちろん出られないし、またどんな猛獣も私の体の上を踏み越えて行かなければならないのです」と。

「わたしは門です」ということばで、イエス様はご自分によって、守りと保護と安全とが約束されていることをおっしゃるのです。イエス様に拠り頼み、イエス様に信頼する者は、今もなお、完全な守り、保護、そして安全を経験します。

悪い羊飼いや盗人たちは自分自身のことしか考えません。羊たちのことは彼らにとって真剣な問題とはなりません。盗人は盗み、時には人を殺します。けれどもイエス様は自分自身をまったく忘れ、いつでも羊たちの救いのために、ご自身のいのちを投げ出してくださる覚悟を持っておられます。もう一度、みことばを見ましょう。

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

(ヨハネ　10・9)

なぜ、イエス様は良い牧者なのでしょうか。またなぜ、イエス様は門であると言われるのでしょうか。聖書が語っているイエス様の答えはこうです。「わたしは羊たちのためにいのちを捨てます。彼らの債務と罪のために、身代わりとして死にます。わたしの死は、彼らの罪に対するさばきです。けれども、わたしは単に罪の贖(あがな)いと赦しのためだけに死ぬのではなく、彼らにわたしのいのちを与えるために死ぬのです。羊たちがわたしのいのちを自分のものとすることが出来るように、わたしはいのちを捨てるのです」。

良い牧者イエス様は、ご自身が人間に代わり罪その

ものとされたことをよしとしてくださっただけではなく、よみがえって再びご自身のいのちを受けてくださいました。イエス様は今も生きてなお臨在しておられ、私たちのために祈っておられ、私たち一人一人のことを考えていてくださるのです。良い牧者の配慮のもとで生活することは、まったき安心があります。必要な糧を備え、病気になった時に看病してくださり、誘惑から守り、そしてさらに多くの守りと安全を保障してくださいます。イエス様に信頼する人は失望させられることがありません。

イエス様は父なる神に至る唯一の門であり、天国に至る唯一の道であり、イエス様お一人だけが、罪の赦しと永遠のいのちを提供していてくださるお方です。

「だれでもわたしを通って入るなら、救われます。」（ヨハネ10・9）、これこそ、喜びの訪れ、すなわち福音です。ありのままの状態で、まさにそのままの状態で、誰でもがイエス様のみもとに行くことを許されています。イエス様は待っておられ、決して拒むことをなさいません。イエス様は赦し、癒して、解放してくださり、ほんとうに新しくしてくださいます。

次のみことばは、みなが暗記している素晴らしいことばです。

彼に信頼する者は、失望させられることがない。
（ローマ　10・11）

イエス様は唯一の良い牧者であり、イエス様だけが決して失望させることのないお方です。イエス様は、罪人が解放されるための唯一の門です。誰一人として、イエス様のみもとに行く者は失望させられることがありません。求めているものを間違いなく見出すことができるのです。

3. わたしは父の息子です

そして三番目に、「わたしは父の息子である。わたしは父なる神を冒涜（ぼうとく）する者ではない」と証しされたのです。またイエス様は多くの奇跡を行いましたが、いつも「父のみわざを行うのです」と言われました。奇蹟はご自分のわざではなく、ご自分が御父と結びついて一つになっていることを現すことに他ならないと、イエス様はいつも証ししてくださいました。みことばを見てみましょう。

わたしと父とは一つです。
（ヨハネ　10・30）

もし、わたしが、わたしの父のみわざを行なっていないのなら、わたしを信じないでいなさい。しかし、もし行なっているなら、たといわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父にいることを、あなたがたが悟り、また知るためです。
（ヨハネ　10・37、38）

つまり、イエス様は永遠から永遠に至るまで父と共におられ、力、権威、知恵、愛、恵みの点においても父なす。ヨハネの福音書の中でイエス様は生ける神を「わたしの父」と80回以上も呼んでおられます。「天と地を創造されたお方とは、わたしの父なのだよ」とイエス様は言われたのです。

わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしにはそれを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。
（ヨハネ　10・17、18）

ここでイエス様は「わたしの父」と言っておられます。イエス様はただ父なる神によってよみがえらされただけではなく、イエス様ご自身の力でもって、よみがえられました。すなわち、父なる神がおできになることは、御子イエス様もまったく同じようにおできになるので

イエス様の証し（1）

る神と完全に一致している、とおっしゃったのです。

これまで見てきたように、イエス様はご自身について、良い牧者であり、門であり、また父の息子であるという証しをなさいました。イエス様ご自身がそのようにご自分を表わして啓示してくださったのです。

イエス様がご自身を表わしてくださるとき、人々の反応は二つの形をとります。一方において、31節に「ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた」とあるように、多くの人々は石をとり、彼を殺そうとしました。他方において42節を見ると「そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた」ことがわかります。

これまで、イエス様のように言明した者はひとりもいません。イエス様は、「わたしだけが良い牧者であり、ただわたしひとりのもとにのみ、本当の満足があります。わたしだけが門です。わたしを通らなければ、誰も父のみもとに行くことはできません。またわたしだけが父と一つになっている者です。わたしは永遠なる神です」とおっしゃいました。この言明により真理を語っておられたということは、その復活が証明しているのではないでしょうか。主イエス様を信じ、次のように証しできる人は、本当に幸せなのではないでしょうか。

「私は主が良い牧者であることを知っています。イエス様は私の牧者であり、その主に私は信頼し、心から従いたいと思っています。

また私はイエス様が唯一の門であることを知っています。イエス様お一人だけが、あらゆる問題の解決です。イエス様のみもとに来て後悔した人はひとりもいません。そして私は、イエス様が約束された救い主(メシヤ)であることを知っています。イエス様は永遠なる神です。主は、私の罪を赦してくださり、私に永遠のいのちを与えてくださったからです。」

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音されています。

わたしは、よみがえりです。いのちです

滝 泰治

神の御子イエス様は、エルサレムから約三キロメートル東にあるベタニヤ村に住んでいたマルタに言われました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

(ヨハネ 11・25、26)

とても、難しいことばです。何か禅問答をしているようで、よく分かりません。

わたしは、よみがえりです。いのちです

「イエス様を信じる者は、死んでも生きる?」、「生きていてイエス様を信じる者は、決して死ぬことがない?」イエス様は、何を語られているのでしょうか。

イエス様は三十歳になったとき、福音伝道を始められ、パレスチナ北方のガリラヤから福音を伝えるためにエルサレムを度々(たびたび)訪問されていました。ベタニヤ村にもイエス様は、伝道旅行の度に立ち寄って、親しくお交わりをしておられました。マルタには、仲良しのマリヤと弟ラザロがいました。

ラザロが病気になった時、マルタとマリヤはイエス様に使いを出し、「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」と伝えました(ヨハネ11・3)。姉妹

たちは、イエス様が多くの病人に奇蹟をなされ、病気が治ったことを聞いていました。イエス様が来てくだされば、きっと弟の病気も治ると考えたのではないでしょうか。しかしイエス様は、ラザロが病気になったと聞いた時、こうおっしゃったのです。

イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

（ヨハネ　11・4）

そして、そのおられた所になお二日とどまられました。この時イエス様は、直ちにベタニヤへ行きラザロの病気を治すことよりも、もっと大きなわざをなさろうとしておられました。イエス様のご愛とご計画は、私たちが考えるほど小さなものではなく、私たちの思いをはるかに超越していて、はっきりと「これは神がされた。神にしかできない」と確信できるほど大きなものです。

ラザロの病気の知らせを聞いた後、二日たってからイエス様は、「もう一度ユダヤに行こう。」…「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」と言われました。そこで、弟子たちはイエス様に言いました。

「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

（ヨハネ　11・12～15）

イエス様は、「わたしたちの友ラザロは眠っています」と語られました。イエス様の福音を信じる者にとって、死は一時的なものであり、主が再臨される時、目が覚めるのと同じ様に私たちはよみがえりのからだを与えられます。ですから、今の死は眠っているのと同じであるとイエス様は語られたのです。そして一行はベタニヤに着きました。

イエス様の愛するラザロは、病気で死んでしまいました。姉たちや周りのユダヤ人たちは深い悲しみと嘆きの中にいました。

マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」

（ヨハネ　11・20～24）

妹マリヤも悲嘆にくれていました。イエス様は、マリヤや他のユダヤ人たちが悲しんでいる姿をご覧になり、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じ、そして涙を流されました。

イエスは、まだ村にはいらないで、マルタが出迎えた場所におられた。…マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」

そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。

（ヨハネ　11・30、32～35）

「死」が、人々にどんなにか大きな悲しみと苦しみを

わたしは、よみがえりです。いのちです

もたらしているか、それに対する憤りと悲しみでありました。「罪」によって「死」が全人類に広がったのです。

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。（ローマ　5・12）

聖書が記す「罪」とは、「的外れ」の意味です。「的」とは、宇宙を造り、地球を造り、人間を造られた創造主である神を指します。「外れ」とは、背いている状態を指します。従って、「的外れ」とは、神の方向を向かず神に背き、自分の思いのままに歩むことを指し、聖書ではこれを「罪」と言います。聖書の示す「罪」とは、この世の法律を犯すという意味ではなく、創造主なる神から離れてすること全てを指しています。

イエス様を悲しませることも全て「罪」です。それでは罪を犯さず生きることなど無理だと思われるかも知れません。そうなのです。聖書には「義人はいない。一人もいない」と記されています。私たちは誕生した時から、「罪人」の状態にあります。アダムが神との約束に背いた「罪」とそれによる「死」を受け継いでいます。その罪の性質のため、誕生した時、肉体は生きてはいるが、神から遠く離れ、霊的には死んでいる状態なのであります。神は聖なるお方であり、罪ある人間はそのままでは、神に近づくことができません。永遠の滅びに至るしかありませんでした。

ラザロの死と復活から数か月後、イエス様は、私たち(私)の罪を贖うため、十字架に架かり、血を流し死んでくださいます。そして葬られ、三日目によみがえられるのです。

よみがえられたイエス様は、十一使徒とその仲間が集まっている場所に姿を現わし、「霊」ではなく生き返ったことを分からせるため、焼いた魚を召しあがり、次のように語られています。

そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。

（ルカ　24・45～48）

人は「例外なく死ぬ」ことが、私たちの人生において苦しみや悲しみ、また空しさをもたらします。そこから脱出する道は無いのでしょうか。

神が私たちの「たましいの救い」のために用意された道があります。それは「イエス様が、私の罪を贖うため、十字架に架かって死んでくださり、葬られ、よみがえられた」という事実を受け入れ、イエス様に信頼して歩む。そのとき神に対する背きの罪が自覚されれば、悔い改めへと導かれます。そして自分の罪の深さを知らされるほどに、イエス様の十字架のみ業は、私の罪の贖いのためであったことの確信へと導かれます。これが信仰による救いです。霊の目が開かれ、たましいの救いが成就していきます。

ラザロが死んで、すでに四日たっていました。腐敗が始まっていたラザロに対して、イエス様は一言「ラザロよ。出てきなさい。」と大声で叫ばれました。すると、体を白い布で巻かれたままのラザロが、出て来ました。イエス様は「ほどいてやって、帰らせなさい。」と言われました。

死人をよみがえらせたこの奇蹟を見た多くの群衆がイエス様を信じました。しかし、このことが宗教指導者たちをイエス様の殺害計画に駆り立て、数か月後の過越の祭りの時、イエス様は十字架に架けられ殺されます。

イエス様は死んで葬られた後、よみがえられます。聖書は、イエス様の福音を信じる者は、今の肉のからだが滅んでも、イエス様のよみがえりと同じ様に主の再臨

わたしは、よみがえりです。いのちです

のときによみがえりのからだを与えられ、「永遠のいのち」に生きると記しています。「永遠のいのち」とは、イエス様の福音を信じる者に、信じた瞬間に与えられる、時間を超えた、新しい「霊的ないのち」です。

私が初めて聖書に出会ったのは、四十歳になろうとする時のことでした。人間ドックの受診で胆嚢に影があると言われ、良性か悪性か超音波診断だけでは分からない、悪性であれば大きくなると医師に告げられました。働き盛りだった当時の私は、爆弾を抱えて仕事をすることはできないと考えて、妻に相談することもなく、自分勝手に入院の手続きをし、胆嚢の摘出手術を受けたのです。切り取られた胆嚢は、「ピチピチしていて本当にもったいなかった。」と妻から後で聞かされました。しかし、この体験を通して、イエス様は私を導いてくださったのです。退院して聖書に触れる機会があり、神様(イエス様)にお会いしたいという思いを持つようになりました。

それ以前の私は、「太陽」を崇拝していました。太陽こそが、ありとあらゆる命の根幹であり、太陽がなければ人間はこの地球上で存在できないと考えていました。朝、太陽に向かって手を合わせていたのです。その理由として、次の二つを自分なりに考えていました。

一つは植物の炭酸同化作用です。植物は太陽光によって、空気中の二酸化炭素と水分から、「ブドウ糖」を作り、そのとき水と「酸素」を放出します。作られた「ブドウ糖」は、植物のエネルギーや「タンパク質」の原料となって、植物が成長するのです。植物がもたらす「酸素」と「タンパク質」が無ければ、人間の生命は維持できなくなります。

二つ目は恐竜が氷河期に絶滅したことです。地質学者の研究記録から、地球上に恐竜がいたのはおよそ二億三千万年前から六千六百万年前までの中生代と呼ばれる地質時代だったそうです。そして約六千六百万年前、恐竜は地球上から姿を消しました。メキシコ・ユカタン半島沖に落下した隕石とそれに伴う気候変化が、絶滅の直接原因だという説が有力です。大量のちりが空を覆い、太陽の光が地表に届かなくなり、暗く寒い時代が続き、植物は枯れ、恐竜も死んでいきました。太陽光エネルギーが無ければ、この地球は完全に冷えてコチコチになって、人間さえも住むことができなくなります。

朝の太陽が昇らなければ、地球上の人間はかつての恐竜のように絶滅するしかありません。ですから私は、太陽に手を合わせていたのです。

ところが、退院後、聖書を見てびっくりしました。

ついで神は、「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のために、役立て。天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と仰せられた。するとそのようになった。それで神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。神はそれらを天の大空に置き、地上を照らさせ、また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神は見て、それをよしとされた。（創世記　1・14〜18）

旧約聖書の、それも一ページ目から、このみことばが目にささり、聖書の神様は本物だ、太陽をさえ創造された方がいたと、夢中で聖書を読みすすめました。

しばらくして、仕事上の空しさ―心の空洞―から解放されました。仕事が上手くいこうがいくまいが、イエス様が導いておられることが確信できるようになったからです。むしろ、上手くいかなかった時の方が、イエス様がどのようにそこから脱出させてくださるかを自分で確認できるので、祈りながら導きを覚えるのが楽しみになっていきました。

「わたしは、よみがえりです。いのちです。」

（ヨハネ　11・25前半）

わたしは、よみがえりです。いのちです

このみことばは、イエス様が「いのち」を与え、保ち、回復させる力を持たれていることを意味しています。イエス様は、「いのち」の与え主です。主にあって私たち人間は生きる者となりました。イエス様は、「死」の根源である罪の解決のために、私たちの罪の身代わりとして十字架に架かられました。そして、「死」に打ち勝った証しとして、三日目によみがえられたのです。この「よみがえり」こそ「死」からの解放、「死」への勝利であります。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。（1コリント　15・55〜57）

イエス様の福音を信じる者にも、ひとりの例外なく「死」は訪れます。信じる者の場合は、肉体の死と同時に、霊とたましいはただちに天上のイエス様のみもとに行きます。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。（ピリピ　3・20、21）

以前の私は、「死」をとても恐れていました。死んだらおしまい。何もかも無くなってしまう。ひとりで何処か、わけの分からない所に行ってしまう。この世の家族や友人とも会えなくなって一人ぼっちになってしまう。そのように考えていました。ですから「死」をとても恐れていました。今から考えると「死後どこへ行くのか」全く分からなかったから「死」を恐れていたのだと思います。現在は「死」の恐れからも解放されました。私の

霊とたましいは、この世の生活の後、主なる神のみもとに帰るとの確信をいただいています。

私を愛し、十字架上で血を流し、私の罪の身代わりとしていのちを捧げてくださり、三日目に「死」からよみがえられたイエス様が、この世にあっても、「死」を体験する時も、死んでからも、永遠に共にいてくださるのです。「死」は決して終わりではなく、イエス様が再臨される時、私たち信じる者はよみがえりのからだをいただいて、先に召された主にある兄弟姉妹方とも再会でき、永遠の御国に入れられます。

生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。（ヨハネ　11・26前半）

イエス様は「霊的ないのち」について語られました。聖書には、次のように記されています。

イエス様の福音（イエス様が私の罪のために死なれ、墓に葬られ、三日目に復活されたということ）を信じる者は、霊の目が開かれ、霊的に新しく生まれることができる。この新しい「霊的ないのち」は、生きているうちから与えられ、肉体が滅んでも、決して死ぬことがありません。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。（ローマ　6・4）

「罪」により、神に対し死んでいた者は、イエス様の福音を信じ、今までの歩みを悔い改めるなら、聖霊によって生かされ、信仰のいのちと神の愛の働きによって霊的にも生きる者とされるのです。

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神のくださる建物があることを、私たちは知っています。

わたしは、よみがえりです。いのちです

それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからではなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。（2コリント　5・1〜4）

イエス様は、愛する人の「死」に打ちのめされ、悲しみと嘆きの中にある人に深く同情されただけではありません。人は「死」に対して全くの無力であり、対応できません。イエス様の福音を信じない人の「死」は、恐れと絶望しかないのです。それに対して、イエス様の福音を信じ、それにあずかる者の「死」は、「よみがえり」と「永遠のいのち」であります。

死んで既に四日もたったラザロをよみがえらせたこの奇蹟は、イエス様を信じる者が永遠のいのちを与えられる「しるし」ともなりました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）



滝（たき）泰治（やすじ）（市川キリスト集会）

主の祝福

平野 恭子



恭子さん（中央）、ご家族に囲まれて

主の御名をほめたたえます。
私が主イエス様からいただいた救いと恵みについてお証しいたします。

事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべての事を祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。（申命記　2・7）

母の信仰と私の子供時代

私が信仰を持つようになったのは、母が信仰を持っていたことからです。昭和の初め、東京に住んでいた母は、「文学」を通じて父と知り合い結婚しました。母が信仰をもったきっかけは、近くの警察署長さんから福音を聞いたことです。昭和初期のリバイバルがあった中田重治監督のおられた教会に集い、中田夫人の説教を

聞いたそうです。母はどんな事にも祈りながら対処し、六人の子供を育て、三畳の部屋には祈りのための母の座布団がいつも置かれていました。

私は一九四三年五月、兄二人、姉二人、妹と六人兄妹の五番目として、東京の淀橋区(今の新宿区)で生まれました。一年後には戦争が激しくなり、東京から父の実家のある、福岡県豊前市に疎開しました。

主イエス様との出会いは小学生の頃です。当時、夏期伝道に来られていた聖書学院の女性の修養生の方から、みことばカードをいただいたり、聖書物語を聞いたりしました。楽しいひと時でした。自分から主を求めるようになったのは、学生時代にYWCAに所属して、バイブルキャンプなどに出席するようになったことからです。しかしそこでは、はっきりとした罪からの救いには至りませんでした。

最初の就職と試練そして受洗へ

学生時代は山口市で二年間を過ごし、卒業後は父や姉がいる東京へ出たいと思いましたが、最初の就職先は茨城県水戸市の私立高校になりました。その最初の職場で味わったのは、将来に対する失望感でした。ワンマンで人を人とも思わぬ理事長に夜まで働かされ、就職して一年後に、教職員のストライキ即ち授業放棄があり、一緒に就職した同僚たちが次々に辞めていきました。そのようなことがあって、飢え渇く心が与えられ、母から紹介された教会へ行くようになりました。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。（2コリント　5・7）

このみことばにより、二十一歳のクリスマスに主イエス様を救い主として受け入れ、洗礼を受けました。

当時、家を出てきた以上、たやすくは実家に帰れないという気持ちで働いていましたが、信仰をもってからは祈りに導かれるようになりました。最初の職場で行きづまりを体験し、次の就職先を探すために乗った常磐線の電車の中で、「神様。みこころなら、もう少しこの関東の地で働かせて下さい」と祈りました。すると主は、訪ねた先の学校の玄関で、前の学校に勤めていた先輩の先生に出会わせてくださり、その方の紹介で土浦にある女子高校へ就職することができました。そこでは、教師として働く事をあきらめ、その年の夏休みに東洋大学司書講習に通い、図書館司書の資格をとり、付属短大の図書館で働くことになりました。このことを通して、私の祈りが聞かれるということを体験しました。

また私の人生において、実社会でのこの三年間は、人間の醜さや社会の裏面を見せつけられ、心がぼろぼろになるほどの挫折感を味わった時でした。その後は、母の一人居る九州の実家へ帰り、通える所に職場が与えられました。

結婚への導き

二十五歳になって、「主は私をこれから結婚に導いてくださるのですか、それとも職業婦人として仕事へ導かれるのですか?」と真剣に祈りました。

一九六九年の秋、教会の特別伝道集会に集うため、豊前から熊本まで出かけ、そこで今の主人である精藏さんと出会ったのです。お世話してくださる方もあり、私達は主の導きにより結婚致しました。

一九七〇年五月、結婚して熊本県宇土の主人の実家に住みました。長女、そして長男が与えられ、さらに、次女が与えられました。

次女は望美という名前でしたが、一九七九年四月、二歳四か月で肝臓がんを発病し、一か月あまりで天に召されました。当時、小児がんは少なく、手術をしましたが、進行が速く体力もなかったため、がん摘出後まもなく召されました。次女は、お腹が痛い時、私が「お祈りし

6人の証し

Unser HERR lebt

ようね」というと「イエスさま、…アーメン」と祈り、幼いながらも主イエス様に頼っていました。

…主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。（ヨブ 1・21）

このみことばの心境に導かれるまで一、二年かかりました。

一九七九年春、次女望美が発病する前に、実は私の胎には四人目の子が与えられていました。イエス様は望美が亡くなった翌月に、生まれ変わりのように三女を与えてくださり慰められました。聖書の詩篇「彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。」（詩篇84・6）というみことばから「泉」と名付けました。

前後しますが、一九七八年十月、同居していた主人の母が突然の交通事故によって亡くなりました。そして次女望美のこともあり、私たちは信仰生活のために、実家を出て教会の近くに引っ越したいと考えるようになりました。

宇土から熊本市内へ

主のみこころを尋ねて祈っていると、次の聖書のみことばが与えられました。

はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼はキリストのゆえにうけるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。…（ヘブル 11・25、26）

与えられた二つの事柄、義母の死と次女の死をきっかけに、因習の強い村から出て、教会のある熊本市内へ引っ越すことにしました。私たちが住んでいた地域は神仏混交の習慣が残っており、それにかかわる行事はすべて義母が行っていたので、亡くなった後は、私たちの態度をはっきりさせなければなりませんでした。一九七九年の正月にもたれた村の総会で、「私たちはキリスト信仰に立っているので、お寺や、お宮の行事には一切参加しません」ということをはっきり伝えましたが、よく思わない人もいました。それで引っ越す決心がつきました。次女が召されて一年後、一九八〇年三月の事でした。

熊本での主人の勤め先は叔父の経営する個人商店で月二回しか休めず、毎週の礼拝には出られませんでした。数年後に私たちは、礼拝に欠かさず出られるような仕事をと考えるようになり祈り始めました。

静岡で以前お茶の仕事をしておられたクリスチャンのご夫婦から紹介してもらい、お茶の販売を中心とした自営業を始めることにしました。折しも叔父の長男が店を継ぐために帰ってきたので、これを機会に主人は叔父の店をやめて、主イエス様だけを頼りに二人で自営業を始めました。

こうして日曜日の礼拝を毎週守れるようになり、また、教会の近くに引越したので、私たちは教会でご奉仕をすることもできるようになりました。子供たちも日曜学校に通うようになりました。

しかし、平穏な教会生活のなかで、私たちの信仰は主イエス様が中心ではなくこの世の原理に支配されて、私たち自身がヒューマニズム的考えになっているのではないかという思いに導かれました。

教会を出る時に起こされたことと夫婦の確執

教団本部との関係から長年尊敬していた牧師が教会を出るようになったり、後任の牧師もやっていけないという問題が起こりました。そのときは、どうしてこのようになったのかよく解りませんでしたが、牧師の親族の間で起った問題に巻き込まれた形で、最初に私が教会を出ることになりました。

しかし、後になって知らされたことは、この事は牧師の問題だけでなく、私たちの生ぬるいこの世と妥協した信仰に対しての、主イエス様から与えられた大きな試練だったということでした。今言えることは、教会の中で「こうあらねばならない」という自分達の思いが強く、聖書は何といっているかという事は二の次でした。ですから人間の頑張りが先行して、喜びのない日々であり、家族の間でもいろいろな問題が起こされたのだと思います。

熊本市内の徳王町に住んでいた頃、アルコール依存症の弟を退院後三か月ほど我が家で世話をしましたが、その間に起こされた思いがけないトラブルがありました。

また親子の間でも問題が起こされました。聖書を信じている父親があまりに矛盾に満ちたことを言ったり、変な態度だったので、長女が主人を心療内科に連れて行きました。症状は信仰の問題なので医者にはわからず、診断は「異常なし」とのことでした。

主人はある時は話が普通にできて、「あのときは悪かった」と詫びるのですが、ひとたび、疑いの気持ちがおきると、おかしなことを言い出し、その時はサウル王がダビデをつけねらっていたときの精神状態に似ていたと、後から聞きました。

肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

（ガラテヤ 5・19〜21）

このみことばから、人間の心の奥深いところにある肉の本性というものを知らされました。一人教会に残っていた主人は長年役員をし、教会運営のため牧師を助けて会計担当として、多くの時間をささげて奉仕してきました。しかし、詳しくは知りませんが牧師との信頼関係が失われると、教会運営からはずされて、いわゆる窓際族のようになったようです。そして、私たちが教会を出てから半年後、共に熊本キリスト集会へ集うように導かれました。

キリスト集会への導き

一九九九年春、教会での人間関係はすべて解消し、新しい信仰生活を始めようとしましたが、現実の問題としてこれからどのようにすればよいのか分からず「私たちが主を礼拝する所をお与えください」と祈りました。

三か月あまり祈り続けていると、一九九九年七月のある日、長野の上田に住む集会の方から一本の電話があり、その電話がこのキリスト集会に集うきっかけとなりました。七月のある日曜日に御代田集会の方が熊本に福音メッセージを語りに来られると聞いて出席しました。熊本キリスト集会の礼拝は県青年会館の一室を借りて行われていました。使徒行伝時代のような素朴な雰囲気で、聖書のみことばのみがとりつがれ、虚飾のないメッセージは飢え渇いた心に浸み込んでいきました。

すぐに教会を変わりたかったのですが、会員制の教会に長年いたため、当面の教会行事をすませ、牧師には手紙を書き送りました。私は教会を出ることに何の躊躇もありませんでした。

家族のそれぞれの信仰に応じて、長女がロサンゼルスのバイブルキャンプに参加した後に、私は一九九九年の十二月にもたれた沖縄キャンプに参加し、ベックさんとお話の機会が与えられてから、長い間慣れ親しんだ教会を去りました。

二〇〇〇年から、このキリスト集会に集える喜びも

6人の証し

Unser HERR lebt

幸いなことよ。主に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかった、その人は。わが神、主よ。あなたがなさった奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。

（詩篇　40・4、5）

この詩篇のみことばはずっと私の心のうちにあり、このみことばにより、今まで起こされたすべてのこと、教会を出るようになった事や人間関係が壊れてしまった事、主人や子供達のうちに起こされた事などは、主がなさった奇しいみわざであり、主のご計画であった事を知りました。

しかし「こうあらねばならない、ああしなければならない」と言う律法的な私たちの考えは子供を主の愛から離れさせてしまい、律法に支配されていた私たちは、律法を守れないジレンマから、何かにつけて裁き合っていました。

おきて(律法)からの解放

そのような時、ベック宣教師の「おきての支配からの解放」というメッセージを聞きました。

それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、ということを知らないのですか。――私は律法を知っている人々に言っているのです。――

夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行っても、姦淫の女ではありません。私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでいるのです。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえった方(イエス様)と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。

（ローマ　7・1～4）

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

（ローマ 6・4）

私は聖書のみことばに頼ることにより律法から解放されました。そして、みことばによって養われることを体験するようになりました。また、ウォッチマン・ニー氏の「わたしたちの生命(いのち)」というメッセージから、いのちそのものであられるイエス様ご自身に、すべての事をゆだねられるようになりました。

ありましたが、家庭の中の秩序は崩壊していました。集会に集うようになって第一に示されたことは、私は自分のことを棚に上げて、人をさばくものであり、主人を批判し、家庭の秩序を乱すものであったということでした。主イエス様を私の心の隅に押しやっており、私が家庭を支配しておりました。主人に従わない妻であり、自分こそ悔い改めるべき罪人であった事を知らされました。

ある集会のご婦人の手紙から、自分の高ぶりと不遜な態度を示され、主イエス様と主人の前に悔い改めました。それから、福音メッセージテープを聞き、証しの本を読み、主イエス様との関係を正しくしていただきたいと思っていました。

集い始めて、二、三年たったある日、テープを聞いていた時に、その中で次のみことばが私の心に飛び込んできました。

私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。（コロサイ 3・4）

いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。…（ピリピ 2・16）

このように「いのち」に関するみことばが目に留まるようになり、いのちである主イエス様ご自身を求める事の大切さを知るようになりました。自分のうちから出てくる思いや考えではなく、私たちの内側に住んで働いてくださる御霊（みたま）なる主イエス様を畏（おそ）れて、それに従うように、みこころの道も備えてくださると聖書は言っています。

私の心の中にある自己中心や自己満足、自分の正しさを主張したり、自分をも欺（あざむ）く自己欺瞞（ぎまん）、自己憐憫（れんびん）などにつながる思いは罪であることを知り、この私の罪のために十字架にかかってくださったイエス様の血潮による罪の赦（ゆる）しをいただいていることに改めて深く感謝しました。

この集会で、賛美と祈りにより主イエス様だけを拝する礼拝、聖餐の意味、聖書のみことばが取り次がれる福音集会、家庭で隣人の救いのためにもたれる家庭集会、そして悔い改めととりなしの祈りがささげられる祈り会、集会の皆さん（この後、兄弟姉妹と記させていただきます）との親しい交わりなどを通して、私の渇いた魂は主にある希望をとりもどし、主の豊かなご愛に浴することができるようになりました。

義弟の死と良子さんの救い

私たちが長い間通っていた教会を離れる数年前に起こされたのが、弟の死でした。パンの製造会社の早朝勤務だった弟が、事情があって一週間程、我が家から通勤したことがありました。他の弟たちもその時我が家に集まって、それぞれの問題を話す機会がありました。その頃から、私たちは弟嫁の良子さんと親しく行き来するようになっていました。

ある朝早く、良子さんから「主人が帰って来ない！」との電話を受け、すぐに私たちは皆で宇土の実家に行きました。それから主人が警察に出向き捜索してもらいました。私たちは、すべてを知っておられる主にゆだねて祈りました。ようやく四日目に弟が見つかりました。早朝出勤の折、交通事故を起こし、それを苦にしての自死でした。

さて、良子さんは、ご主人である義弟の死から、いろいろ考えるようになり、その数年後にご自身も、踏切で停車している時に、後ろから追突され、対向車線のトレーラーにぶつかるという大事故に遭（あ）いました。その時、車は大破したのですが、体は奇跡的に守られ、額（ひたい）を七針縫っただけですみ、その日のうちに家に帰りました。

この二度の試練から、弟嫁は生かされていることの意味を考えるようになり、私たちが集い始めたキリスト集会に導かれ、二〇〇四年の熊本キャンプの時、洗礼の証しにあずかりました。

後で知った事ですが、良子さんは二〇一五年四月の熊本喜びの集いの数日後に、体の急変があり入院し、脳出血のため召されたのでした。その葬儀には事情により出席できませんでした。

しかし、主は私たちの思いも知っておられ、二〇一六年の熊本地震のあと、住めなくなった家の解体、撤去の問題を与えてくださり、甥と話し合うきっかけが生まれました。話し合いながら解体、撤去ができ、五年後の二〇二三年には甥と長男との間で短い話し合いがなされて、心の内を少し話してくれたことは感謝でした。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて、益

6人の証し

Unser HERR lebt

としてくださることを、私たちは知っています。
（ローマ　8・28）

私が四十歳、精藏さんが四十三歳の時に、二人で始めた自営業からくる悩みもありましたが、「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます」（ピリピ4・19）とのみことばを信じることにより、その悩みから解放してくださいました。

ベックさんの「このことはわたしから来た」とのメッセージ（『光よあれ』第7集あとがき）からも、私たちに与えられた環境を支配しておられるお方は、良いことも悪く見えることも、私たちの人間関係にも、お金にも責任を持ってくださる方であり、すべてのことが主イエス様から来ていることを知り、将来に対しての不安が取り除かれ平安が与えられています。

キリスト集会に導かれて二十三年の間、愚かで鈍い私を見捨てず、愛し続け、今も語り続けてくださっている主なるイエス様に心から感謝しています。また、これまで主にあってお交わりいただいた多くの兄弟姉妹のお祈りにも感謝致します。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。
（1ヨハネ 1・3）

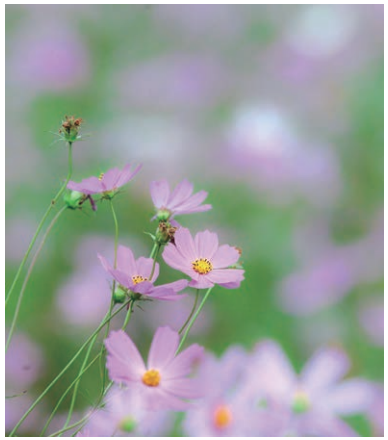
主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。
（箴言 10・22）

6人の証し

Unser HERR lebt

平野 恭子（ひらの きょうこ）
福岡県立築上中部高等学校卒、山口女子短期大学国文科卒、水戸第一商業高校勤務、土浦短期大学、中津短期大学、熊本大学図書館、崇城大学内㈱キンキ書籍部勤務、恵泉園（自営）

夫　平野 精藏（ひらの せいぞう）
長女　那須 麻子（なす あさこ）、夫　昭彦（あきひこ）
長男　平野 義信（ひらの よしのぶ）、妻　里美（さとみ）、孫3人
三女　大里 泉（おおさと いずみ）、夫　周史（しゅうじ）、孫2人



鷲のように翼をかって

池永久一（記　吉村曜子）





池永さん（中央）
池永さんが描いた作品（左下）

池永久一さん（イエス様を信じる者は神の家族であり親しみと尊敬を込めてお名前に「兄弟や姉妹」と呼び交わしており、以後「池永兄」と呼ばせていただきます）は、脊椎損傷という重い障害を抱えた生活の中で救われ、二〇二〇年四月に天に凱旋されました。池永兄がどのように前向きな日々を送り、喜びのある信仰生活を送っておられたのかを、池永兄と親しくさせていただいた中で、池永兄が言われていたことを思い出しながら書いてみたいと思います。

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。（詩篇　119・92、93）

池永兄は、一九五一年、山口県萩市で生まれ、兄が二人、姉、末っ子として四人兄弟の中で育ちました。日本海の漁村の風景を見ながら、将来は日本料理の板前になることを志し、萩の旅館で修行されていました。池永兄は「吉村さん、包丁一本、さらしに巻いての世界だよ」と明るく笑って話してくれました。

池永兄は二十四歳の時に萩市の菊ヶ浜海水浴場に友人と遊びに行った時に、海に飛び込んだ場所が遠浅になっていて頭を強く打ちました。立ち上がろうとしましたが起き上がれなくて、苦しくてもう駄目だと思い、「神様、助けて」と心の中で叫んだ時に、誰かが自分の身体を抱き上げてくれたそうです。砂浜の近くの木陰で本を読んでいた男性が、池永兄が海に飛び込むところを見たのですが、浮いてこないので、心配してその場所に駆けつけたそうです。その人が、池永兄が飛び込む一瞬を見ていなければ、池永兄は助かりませんでした。すぐに救急車で運ばれて、一命を取りとめましたが、脊椎損傷という首から下は麻痺の状態で、自分の身体を思うように動かせない重度の身体障害者になってしまいました。最初は、治療を受けて良くなると思っていたそうですが、だんだんと自分で身体を動かせないことが理解できた時はショックで、付き添って手助けしてくださるお母さんに辛く当たって、わがままを言って困らせたそうです。当時、付き合っていた彼女にも辛く当たってしまい、彼女とは別れることになり、全て自分が悪かったと話されていました。数か月して病院から、山口県防府市の重度身体障害者施設の「華南園」に入所することになりました。

お母さんは、池永兄のために十年間介護のお世話をされていましたが、お姉さんによると、急に具合が悪くなり、亡くなられたそうです。池永兄は絶望して、死にたいと思うようになっていきました。

池永兄は華南園で、どうすれば自殺できるだろうかと何度も考え、ある日、近くの三田尻港へ車椅子ごと飛び込むつもりで、広島におられるお姉さんに別れの電

話をしました。車椅子で施設を抜け出して港の近くまで行った所に、お姉さんからの電話で池永兄が自殺するつもりだと知った施設の職員が追いついて、止められたそうです。他にも自殺未遂はあったようですが、自殺も自由にできないと話されていました。

池永兄が生きる希望を持てなかったところへ、防府におられた山口集会のI姉妹が華南園の施設でボランティアをされていて、池永兄と出会うことになりました。I姉妹は施設に入所している女性に集会の証し集『光よあれ』をボランティアに行く度に渡していたのですが、彼女は読む気がなく自分の本棚に溜めていたそうです。池永兄がその本について聞くと、「池永兄が読むのなら全部あげる」と言われて、池永兄が『光よあれ』を読むことになりました。『光よあれ』を通して池永兄はイエス様と出会い、暗闇から本当の光を見つけることになりました。三十代後半のことです。そして、一九九三年に池永兄は広島喜びの集いでベック宣教師（以後ベックさん）から洗礼を受けました。

それは彼らの目を開いて、暗闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。

（使徒　26・18）

池永兄は知り合いの画家の方から、施設にいるなら趣味を持った方がいいと言われ、絵を描くことを勧められました。その方の指導を受けて、握力はないので右腕に装具をつけて筆を固定して、腕を上下に動かして油絵を描くようになりました。信仰のない時に描いたという「空洞の木」が施設に飾ってあるのを観ましたが、木は枯れていてごろっと倒れていました。木の中が空洞で暗くなっており、黒っぽい灰色の背景でした。これは自分だと教えてくれました。西洋人形の絵もありましたが、暗い表情の淋しい絵でした。信仰を持つようになって描いたという絵は「蛸壺」という題で十五号（長辺が約652㎜）位ほどの大きい絵で、池永兄の育った漁師街の活気のある絵でした。これは山口県絵画コンクール障害者の部で山口県知事賞を受賞していました。二〇二三年五月、池永兄の納骨の時に、御代田の福音センターに持参した花の絵は明るくて彩り良く、イエス様によって与えられた心の喜びや平安が表されていると思います。（ご本人の写真と共に掲載の絵です）

また、池永兄は無線をしていてそれで友人になった人に、イエス様のことを伝えていました。華南園の近くに住むその友人ががんになったことを知り、彼に集会の証し集『光よあれ』を渡すため、一緒についてきて欲しいと言われ、私は池永兄の電動車椅子の後を付いて行きました。友人の自宅の玄関で、応対に出られた友人に向かって「イエス様を信じて天国に行ってください」と言われた時は、一瞬、驚きましたが、池永兄の一途な思いは友人の心に伝わり、後にお元気になられて施設に訪ねて来られました。

池永兄は五十代後半になると体力も落ちてきて、絵が描けなくなりましたが、無線は続けて二級取得を目指して勉強されていました。更に広い範囲の方達と交流したいと思っておられたのだと思います。

池永兄は身体が不自由であっても、自分でできることを探し、携帯でメールを打ちたいから教えてほしいと言われ、消しゴムの付いている鉛筆を利用して、消しゴムのない鉛筆の先の方を布でくるんで口に加えて、一文字ずつ時間をかけてメールを打つ練習をしました。メールアドレスは旧約聖書の「ヨブ」という名から始まり、自分をヨブのようだと例えていました。メールでやり取りができるようになりました。

あなたは、長い旅に疲れても、「あきらめた。」とは言わなかった。あなたは元気を回復し、弱らなかった。

6人の証し

Unser HERR lebt

（イザヤ　57・10）

池永兄は、施設の中では障害のせいで親しく話せる方が少なくて職員も忙しいので、外からの集会の兄弟姉妹の訪問を心待ちにしておられました。「いつでもウエルカムだよ」と言われ、主にある兄弟姉妹との交わりを喜んでおられました。車椅子で迎えてくれる日もあれば、ベッドで横になったまま、交わることもありました。I姉妹が名古屋に引っ越された後は、私や主人が福音メッセージや証しの録音テープ、CDなどを届けたり、買い物や食事も一緒に行きました。もちろん、他の兄弟姉妹方も施設を訪ねて、池永兄を助けてくれました。池永兄は届けられたものを聴くのが早く、楽しみにされており、私もどれを持って行こうかと選ぶうちに、お陰で沢山メッセージを聴く機会が与えられました。

まだ山口集会が定期的に集まることのなかった頃、華南園の施設で集会を持ったことがありました。広島や福岡からも参加してくださり、賛美の声に驚かれた施設長さんが、池永兄に「次からは他でしてください」と言われ、それから山口市のS姉妹の自宅で家庭集会が開かれるようになったそうです。山口での第一回目の集会は池永兄の施設からでした。

広島や山口の兄弟達が時々、池永兄の体調の良い時に、山口集会に池永兄を車に乗せて来てくれました。池永兄の集会に行きたいという思いは強く、広島の喜びの集いにも兄弟達の助けを借りて、車に乗って数回、参加しました。池永兄が礼拝にも参加できるように、月に一回、防府の施設に近い場所で集会を開くようになりました。礼拝の時には積極的にみことばを読み、祈られました。前日から読むみことばを決めておられました。

人々が私に、「さあ、主の家に行こう。」と言ったとき、私は喜んだ。

（詩篇　122・1）

池永兄は、自律神経が麻痺しているので体温調節がうまく出来なくて、常に発汗したり、頭痛、高熱、不眠に悩まされ、痛みを感じないので床擦れが酷くなって手術になったこともあります。池永兄は、脊椎損傷の手術を受けた時に輸血でC型肝炎ウイルスに感染して以来、身体がだるく、更に年齢が増すごとに体力が衰えて来て、集会から帰った後は、熱が出て、不眠が続き、苦しい思いをされることも多かったようです。「僕は、命がけで集会に行っているよ」と言われたことがありました。たとえ体調が悪くなっても、覚悟されて、集会には参加して、共に主を賛美し、喜びたいと願っておられました。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

（2コリント　4・16）

6人の証し

池永兄は、自分が身体障害者になったことを悔やんでいないと言われました。「健康だったら、自分は傲慢だからイエス様の話を聞く気持ちにならなかったし、救われていなかったと思う。イエス様を知って、自分の罪を知り、救われて本当に良かった。感謝だよ。」と話されていました。

二〇一九年、池永兄は病院で大きな胆石と胃がんが見つかり、取り除く手術をされました。二か月後に息苦しくなり、再び病院も変わり、人工呼吸器を使うようになりました。人工呼吸器をはずさないように両手はミトンをして紐でベッドに固定され、自由に喋ることも難しくなりました。どんなに辛いかと思いましたが、お見舞いに行くと、いつも、聖書を読んで祈ってと言われ、池永兄も「イエス様に感謝です」と祈られました。池永兄が華南園の施設にいた時は、少し神経質なところがあり、眉間にしわがよるような表情も見られましたが、入院されてからは、状態はどんどん悪くなるのに、表情

は優しくなり、目が澄んできて、きれいだなと思うことがありました。また、神様は池永兄の記憶を消されて行き、日にちや自分が手術をして入院していることも忘れてしまったようでした。けれども昨日のことは忘れても、集会のことは忘れない、毎日が新しくイエス様と出会うことができました。兄弟姉妹達がお見舞いに行かれると、池永兄は穏やかな表情で嬉しそうに交わっておられ、一緒にお祈りができたことを感謝しておられました。池永兄に「心に平安がありますか?」と聞くと、「平安。幸せ」と答えられました。主のみわざでしかないと思いました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

池永兄の病室に入ると、枕もとの近くにお姉さんの娘の子どもさんの可愛い写真が飾ってありました。「吉村さん、可愛いじゃろ」と何度も言われ、お姉さん達は広島県呉市におられ、山口からは距離があってなかなか会えないので、写真を見てお姉さん達家族のことを想い、祈っておられたのだと思います。

池永兄は特別に称賛される信仰を持っていたわけではありませんでした。日々の施設での生活において、いつもイエス様に祈っていると言われていましたが、施設の職員の方に感謝しているのに、職員の方に自分の思うようにならないジレンマやわがままな気持ちをぶつけて衝突したこともありました。後で素直に、「イエス様、ごめんなさい」という気持ちになり、職員の方に謝っていたそうです。感情が高ぶった後も、素直に悔い改め、主の導きに従えるところが池永兄の良いところです。

私は助言を下さった主をほめたたえる。まことに、夜になると、私の心が私に教える。私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。

（詩篇　16・7、8）

池永兄とは二〇二〇年二月にお会いしたのが最後になりました。その日池永兄は「僕は大丈夫」、「天国でベックさんに会えるね」と言って、笑顔で別れました。それから、コロナの影響で面会が出来なくなり、二か月後の二〇二〇年四月二十七日に、天に凱旋されました。六十八歳でした。四十四年間の重い障害から解放され、最期の顔の表情は安らかで微笑んでいるようでした。天国で満面の笑みのベックさんと握手されたことでしょう。池永兄の人生を豊かにしてくださった主をほめたたえます。私達は池永兄と出会えたことを感謝しています。また、天国で逢いましょう。

池永兄の好きなみことば

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。

（イザヤ　40・31）

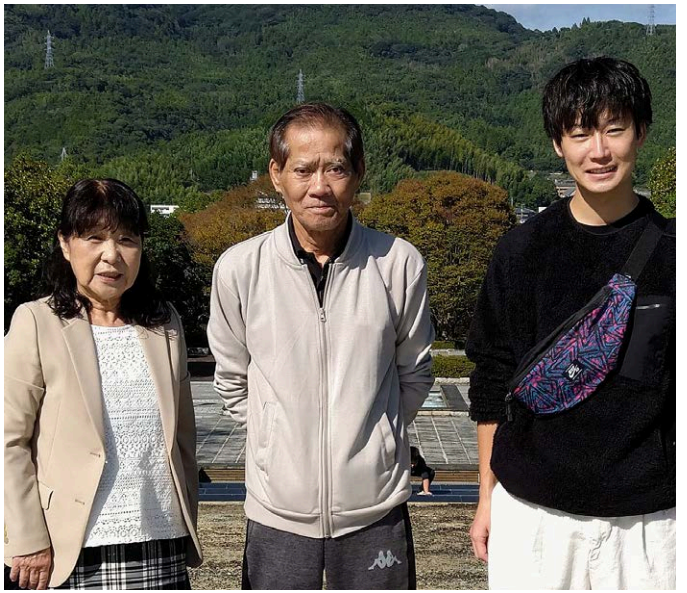
池永 久一（いけなが ひさいち）
一九五一年　山口県萩市に生まれる
二〇二〇年四月二十七日　召天

姉　中原 豊子（なかはら とよこ）
姪　川村 和美（かわむら かずみ）、
　　佐光 園枝（さこう そのえ）

6人の証し

道しるべはイエス様

吉村 曜子



曜子さん（左）とご家族

私は子どもの頃、外では活発に元気に遊んでいましたが、家に帰ると抑圧された気分になり、重苦しく感じていました。原因は父が厳格で神経質なところがあり、家族団欒という家庭ではなかったからです。夕食の時も静かに黙々と食事をする家でした。

私は一九五六年に大阪市で生まれ、祖父母と兄が二人いて、七人家族の中で育ちました。父は言葉の伝え方が悪いと急に怒るので、話したいことは母を通して伝えてもらっていました。時々、父は気に入らないことがあると、腹を立てて母に怒鳴ったり手を挙げることがあり、何も文句を言わない母が可哀想でした。小学高学年の時に、日曜学校に通っていて、聖書にあるように「あなたの父と母を敬いなさい」と教えられましたが、私は父を敬えないと思いました。

中学生になって堺市に引っ越したため、教会に行くこともなくなり、親への不満や苛立ちを心の奥に隠していました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

イエス様に出会ったのは高校生の時です。進学した高校が私立のミッションスクールで、学校では一年に一度、教会に行くと決められた日があり、仕方なく、私は友人が行っている教会に行きました。家ではふさぎ込んでしまう自分の気持ちが、不思議と教会では自由に話すことができて、聖書を学ぶ機会も与えられました。

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

（マタイ　5・44）

自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。

（マタイ　5・46）

私は自分に敵対する者をも愛する、というこのみことばが心に残り、それまで聖書に見向きもしなかったのに、興味を持って聖書を読み出しました。中学生の時に祖母が亡くなり、翌年に親戚の人達が相次いで亡くなり、「人は何のために生きているのだろう。死に向かって生きているのだとしたらむなしいことではないのか」などと考えるようになりました。子どもの頃に疑問に思っていた、「神様は本当におられるのだろうか。神様がおられるのなら教えて欲しい」という気持ちが湧いてきて、夜、寝る前に、誰に向かってかわかりませんが、祈るようになりました。

高校二年生の終わり頃に、聖書を読みいつものように祈っていると、イエス様が十字架に架かって祈られている姿が目に浮かびました。

「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ　23・34）

イエス様を十字架につけろと叫んでいる群衆の中に自分がいると気付きました。

私の頑なで人を許さない思い、わがままで自己中心な考え方しかできない自分勝手な私、それを罪というのだと示されました。イエス様は、私の罪のために十字架刑に架かり、身代わりになって「曜子を赦してください」と祈られたのだと、やっと神様の愛を知ることができました。私は嬉しくて涙が出ました。

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。（ヨハネ　15・13）

私は背中に羽根でも生えたかのように、今までの重苦しかった気持ちが軽くなり、父を責めていた気持ちから解放されました。父を嫌いだと思っていたことは間違いで「ごめんなさい」という気持ちに変えられ、父を受け入れられるようになりました。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。（マタイ　10・34）

私が受洗したいと言うと、父に反対されたので黙って受けました。後から両親にわかってしまいましたが何も言われませんでした。

優しかった母は、私が二十一歳の時に大腸がんで亡くなりました。手術をして一か月で退院できると言われていたのに、一か月で帰らぬ人になりました。家族にとってとても辛いときでした。母は祖父の介護を七年間続け、祖父が亡くなった一か月後に、母も亡くなりました。父は古いのを新しく立派な仏壇に買い換えました。そして、仏事の四十九日が二回続きました。私と父の信仰の確執がよりはっきり現われました。

父は仏壇に手を合わせない私に、「母が悲しんでいる」と言いました。私は、「母は天国にいるのでそんなことはない」と言い返しました。母は入院中に、私がイエス様の話をすると、「退院したら教会に行って賛美歌を歌いたい」、「神様に祈って」と言っていました。母の死後、文語体聖書がタンスから出てきて、昔、教会に行っていたことを母の妹から聞きました。

仏事の準備は父がしていました。ある時、台所のテーブルの上に仏壇の中に入れる敷物が置いてあり、私は知らずにゴミ箱に捨ててしまいました。仕事から帰って来た父が、その敷物を探していて、ゴミ箱から見つけると激怒しました。私の襟元を掴んで、「家の中に二つの宗教はいらない。出ていけ！」と言って、外に追い出されました。私は裸足のまま、家から歩いて十五分程の教会に走って行きました。その日は教会に泊まりました。翌日、父が私の靴を持って、教会に来ました。私は家に帰りましたが、「自分の目のつくところに聖書を置いていたら捨てる」と父に言われました。私は父を愛そうと思っているのに逆らうことになり、父は母が亡くなって娘を可哀そうに思っているのに辛く当たることになり、お互いにぎくしゃくしていて、私は家事を一生懸命することで、父との関係が少しでも良くなり、教会に行かせてもらえるようにと努めました。

神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。（2テモテ　1・7）

私はその教会の幼稚園で働きながら、夜は夜間の大学に編入して勉強していました。大学で好感の持てる

6人の証し

Unser HERR lebt

方と出会いましたが、彼は無神論だったので付き合うことをやめ、叔父からの縁談は価値観が違うので断りました。二人の兄達も仕事や結婚を通して、自立して行き、父と私の二人の生活になりました。私は父が安心してくれるように結婚を通して主を証ししたいと思ったので、真剣に結婚を祈るようになりました。

祈って一年が経ち、牧師先生から山口県に住む今の主人とのお話があり、毎日、決めて読んでいる聖書の箇所に「夫」という文字を見て、会ってみることにしました。

あなたの民と、あなたの父の家を忘れよ。そうすれば王は、あなたの美を慕おう。彼はあなたの夫であるから、彼の前にひれ伏せ。（詩篇　45・10、11）

出会った年に主人は大阪に転勤になりました。私達は信仰の友達になるところから付き合いはじめ、二年後の、主人が三十三歳、私が二十九歳の時に結婚しました。父は私達の結婚を喜んでくれました。そして、結婚して一年後に山口県に転勤になりました。私達が山口県に引っ越した後に、父は誘われて教会の伝道集会に出席しており、「永遠のいのち」の話を聴いてノートに書いていたようです。お寺さんには「仏壇の仏様は偶像だと聞いたけど、どう思うか」と尋ねたところ、お寺さんが「偶像と言われたら偶像です」と答えられたと話していました。父は仏教と聖書両方について興味を持ったようです。

私達は山口県でも同じ系列の教会に通っていましたが、大阪キリスト集会の友人から証し集『光よあれ』や集会の福音メッセージのテープが送られて来て、生き生きとした信仰の証しに心が惹かれ、土曜日は山口キリスト集会に、日曜日は教会に行きました。友人から徳島で集会のキャンプがあることを聞いて、主人に行こうと誘いましたが断られました。しかし一週間祈っていると、主人が急に徳島に行こうと言ってくれたので、「徳島喜びの集い」に参加することになりました。

二歳の息子を連れて車で徳島に向かいましたが、四国に入ってから渋滞でなかなか車が進まず、主人はイライラして不機嫌になり、夜の福音集会に遅れましたが参加できた時はほっとしました。朝の礼拝で、ベックさんのメッセージを聴いた主人は「救われた喜びが戻って来た」と嬉しそうで、ベックさんの話されたことが本当の信仰だと思うと言いました。行きと帰りの車のなかの空気が全然違っていました。車の中で夫婦で久しぶりに今までの信仰の話をしました。そして、主人が「来週から集会に行こう」と言ったので驚きました。

先の事どもを思い出すな。昔の事どもを考えるな。見よ。わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。（イザヤ　43・18、19）

6人の証し

その後、私達が牧師夫妻に教会を出る挨拶をすると、牧師夫妻は「それぞれにイエス様に従いましょう」と言われました。この時から毎週の礼拝を山口集会でささげるようになりました。

山口キリスト集会は山口市内のS姉妹の家で家庭集会として、土曜日に行われていましたが、主人と同じ教会の兄弟も集うようになって、一九九五年、ベックさんからの勧めもあり、礼拝が始まりました。広島キリスト集会の兄弟達も来られて支えてくださり、今もずっと広島集会には助けられています。福音メッセージを語りに来てくださる兄弟は、毎週土曜日は山口集会、翌日の日曜日は広島集会でメッセージがあり、二日間続けてのご奉仕は大変だと思いますが、喜んで来てくださり本当に感謝です。

しばらくしてS姉妹が神奈川県に移られ、礼拝の場所が毎週、転々とするようになり、次の礼拝の場所が与えられるように祈りました。

したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ　9・16）

山口集会のK姉妹が、新幹線が停まる新山口駅付近に行き、歩いていた人に、近くの公民館の所在を尋ねると、「公民館の管理人を知っているので紹介しましょう」と言われ、行ってみました。管理人さんは地元の商店の方でした。場所は新山口駅から歩いて五分位の所にあり、駐車場も近くの商工会議所に交渉すると、土曜日は休みなので借りることが出来、コミュニティセンターも公園の中に有り、子ども達も外で遊べます。木造の古い平屋の建物ですが、山口集会だけで借りられます。私達が借りることになり利用者が増えたという理由で、会場費も安くなり、冷暖房費は無料、トイレや空調機器も新しくされ、机や椅子も揃えて下さいました。神様が用意して整えてくださったとしか思えません。小さな群れの祈りを、主は憐れみを持って覚えてくださり、導いてくださったことを感謝します。この明西会館に移ったのは二〇〇一年七月です。新しい魂が導かれますように祈っています。

御霊に満たされなさい。詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。

（エペソ　5・18～20）

彼に信頼する者は、失望させられることがない。

（ローマ　9・33）

私達夫婦にとって神様からの大きな恵みは、子どもが与えられたことです。

神様のご計画の導きにより、子どものいなかった私たちは特別養子縁組をしました。生後一か月の息子は、主の御手にゆだねて、「成長させてくださるのは神です」というみことばに頼り、主に感謝し、子どもの成長を喜びました。心配していた父は山口に来て、「おまえたちには信仰があるから大丈夫だ。大事に育てなさい。」と言ってくれました。主人の親族も皆、喜んでくれました。

後に長男が大人になって就職する前、小さい頃に伝えてはいましたが、もう一度、私達は本当の親ではなく、生みの親は別の人だということを伝えると、暫くうつむいて考えているようでしたが、顔を上げて「どうってことないわ」と言ってくれました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

父は赤ん坊の息子に会った一年後に肝臓がんで亡くなりました。入院していた淀川キリスト教病院で、『光よあれ』を読んでいましたが、そこで働いていた大阪キリスト集会の看護師さんから、父の病室で、聖書を読み、祈ると父が喜んでいたことを聞きました。主は、父の傍に行けない私の代わりにクリスチャンの看護師さんを置いてくださり、本当に感謝です。家族の救いを約束してくださる主をほめたたえます。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

（使徒　16・31）

迷う時には、イエス様の側に足を一歩、向けるだけでイエス様が導いてくださいました。

自分の思うままに行こうとすると、つまずいて、転びかけることが多く、主のみことばに示されて気がつきます。みことばの光に照らされて、信仰の歩みの小さい優柔不断の者ですが、道に迷わないように、イエス様を

6人の証し

道しるべとして歩んで行きたいと思います。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。悪者には心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。（詩篇　32・8〜10）

吉村 曜子（よしむら ようこ）
私立大阪女学院高等学校卒、大阪キリスト教短期大学卒、大阪教育大学卒
夫　悦昭（えつあき）
長男　敬一（けいいち）、妻　真由（まゆ）

祈れば与えられる最高の恵み

井上 裕之





裕之さん（右端）とご家族。
右下の写真は以前の職場でのラストフライト

みことばのお約束

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）

イエス様に導かれて初めて訪れた神戸キリスト集会の日曜礼拝で目にした、大きな掛け軸に記されていた力強いみことばです。主のゆるぎないお約束でもあります。

生い立ち

私は岡山県で生まれ育ちました。両親と一歳下の妹文子の四人家族で、物心ついた頃から貧乏な生活を送っており、裕福な生活を送っている親戚をうらやましく思っていました。地方特有の先祖崇拝が盛んな土地柄でもあり、「ご先祖様の墓や仏壇、位牌などを粗末にしたら罰が当たるぞ、祟りがあるぞ」と周囲から言い

聞かされて育ちました。

同時に、不慮の事故で脊椎を損傷して車いすの生活を送っていた父と、父を介護する母のもとでは満足に子育てが出来ないだろうという勝手な理由で、私たち兄妹に対して叔父たちが何かと干渉してきました。私は「僕だって欲しいものがあれば、懸賞に応募して手に入れる」と言ったところ、親戚から「生意気だ」「子供らしさがない」と注意されたり、七歳上の従兄弟には「懸賞に当選しても、あとでその代金を支払わなければならない。懸賞はタダじゃない」と詐欺まがいのことを言われたこともあります。

しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。（マタイ　15・18）

貧乏だから神社にお参りしても十分な賽銭を投げ入れられないので、神様が願い事を聞いてくれないのだと思うことがありました。逆に、生を受けた助産所のとなりにルーテル教会があったので「僕は教会で生まれたのだ」と妄想にふけって、外国人が信じる神様に憧れたことがあります。また介護用ベッドの横の本棚の奥に隠してあったギデオン協会発行の新約聖書を、父が密かに読んでいたことも覚えています。父は仏壇や位牌が大嫌いでした。

わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。（マタイ　5・11）

小学校二年生の一九七三年三月、下校時に交通事故に遭い、救急搬送された病院に約一か月入院しました。頭部を強打して三日間意識不明の重体であったため、頭部に何らかの後遺症を懸念する主治医の指示で退院後一年間は、激しい運動や走ることを禁止されました。

学校行事である夏休み中のソフトボールの練習や体育の授業に参加しないことや、集団登校時にゆっくり歩いて登校の列から遅れるのを理由に上級生たちから「運動音痴」と罵られてひどくいじめられました。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。（2コリント　1・4）

寝たきりの父が一九七七年十一月に召されました。父は井上家六人兄妹の長男だったので、先祖の残した田畑を息子の私が管理しなければならないと叔父たちに言われて、数年後に農業高校に進学しました。私は中学校入学前からラジオから流れるビートルズやアメリカのロックバンド等の洋楽を好んで聴いていて英語の成績だけは良かったので、英語や一般科目を重視しない農業の専門科目に興味がなく悩んでいました。

試練と脱出

母親の体調悪化を機に農業高校を中途退学して、町工場で働き始めました。一九八二年三月に母が肝臓がんで召されました。葬儀後に親族会議がありましたが、未成年の私たち兄妹に知らされることもなく財産分与がなされました。

寒村での工場勤務と親戚からの過干渉に耐えられないと思うようになり、衣食住の心配が無く貯蓄が可能な自衛官を志願しました。心配していた交通事故の後遺症や脳波に異常もなく、あっさりと採用されました。離れて暮らす妹の心配がありましたが入隊しました。厳しい集団生活や野外訓練や武術等にも耐えることが出来、数年後に適性・身体検査に合格して飛行部隊に配属されました。

必要な教育・訓練等を終了して順調に勤務をこなし

ていた頃、突然一七〇万円近くの連帯債務が生じました。昇任等で待遇が良くなって、何も理解せずに親族から頼まれて自動車ローンの連帯保証人になった結果でした。また自衛隊入隊前に「妹さんを高校卒業まで面倒を見るために生活費として毎月多額の仕送りが必要」と世話を申し出た両親の知人の言葉を信じて、入隊後1年以上続けた送金が妹の文子に一円も使われずに知人が着服していたことや、知人による奨学金の代理返済等がすべて虚偽であったことが明らかになってきました。

知人が何かと理由をつけて請求してきて、その都度支払った金も返済の可能性がなく連絡も途絶えて、連帯債務の短期完済と奨学金の早期返済に向けて厳しい生活を強いられることになりました。しかし、同時に仕事のストレス発散のために飲酒や衝動買いなどで浪費していた生活が一変して、以前にも増して毎月一定額以上の貯蓄をするようになり、酒好きの同僚たちとの付き合いも断ることが出来ました。このことは、イエス様の恵みであったと思います。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

（マタイ　6・19〜21）

本物の神様との出会い

一九九二年一月にキリスト集会に集っているという元自衛官の先輩から、発刊間もない集会の冊子『光よあれ』第六集と新改訳聖書をいただきました。その「『光よあれ』」の表紙に載っている皆さんの（以後、兄弟姉妹と記させていただきます）の笑顔やその方々の証しにひかれて、むさぼるように読みふけりました。バックナンバー五冊とリンデさんたちの著書も読みたくなり、頼み込んで後日持ってきていただきました。私よりも大きな試練や苦しみを負っている兄弟姉妹がイエス様に出会った喜びの証しを読んでいくうちに、私は言葉では言い表せない喜びと平安で胸がいっぱいになりました。同時に苦労人を装う私自身もイエス様を十字架につけた罪人だということも受け入れることが出来ました。

自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

（ピリピ　2・4、5）

この世の宗教や仏像などは人間が金儲けのために都合よく作った偽物であり、天地万物をお造りになられた神様が罪深い私たちのために遣わされた救い主イエス様こそが本物だと確信しました。

それは、きゅうり畑のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。わざわいも幸いも下せないからだ。

（エレミヤ　10・5）

人間の手で紙や鉄や木などで作られたお守りや仏像、位牌、仏壇に「魂入れ」「魂抜き」と称して、人間である僧侶や神主が神様や死者を自在に操ると言われていることに強く違和感を感じました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。

（マタイ　11・28〜30）

6 人の証し

Unser HERR lebt

当時、大阪府八尾市で生活していた私は、五月第二週の日曜日に、イエス様に導かれるままに神戸キリスト集会の礼拝に初参加しました。

主にある兄弟姉妹が、私を温かく迎えてくださいました。聖霊に導かれるままに兄弟方が次々にイエス様の罪の贖いに感謝の祈りを捧げる礼拝、聖餐式、福音メッセージ、姉妹方の持ち寄りの食事をいただきながら主を中心とした語らいの中で、愛と優しさを強く感じました。若くして両親を失った私にとって、忘れかけた家族のような温かさも感じました。

本物の信仰を肌で感じた私は、身に着けていた幸福を呼ぶペンダント、愛車に吊していた交通安全のお守り、作業用バッグに入れていた航空祖神のお守りなどを短時間ですべて処分しました。

限られた外出可能日は日曜礼拝や生駒、西宮、上新庄、坂出等の家庭集会にも喜びをもって参加するようになり、九月に行われた神戸喜びの集いで初めてベックさんにお会いしました。ベックさんは、自衛官の私がイエス様を信じたことを非常に喜んでくださいました。集会の「喜びの集い」において数人の兄弟姉妹と一緒に洗礼の証しにもあずかりました。東京への長期出張の際には、勤務がオフの日に吉祥寺キリスト集会近辺の家庭集会に導かれて、集われた兄弟姉妹の喜びあふれるパワーに圧倒されながら、夜遅くまでイエス様を中心としたお交わりが与えられました。

その後、妹の文子に信仰の告白をしたところ、私がとんでもない宗教に入信したと大変心配しましたが、みことばと兄弟姉妹の祈りにも支えられてお互いに平静を保つことが出来ました。

新しい生活

大阪と三重県伊勢市の勤務のあと一九九六年三月、導かれて栃木県宇都宮市での勤務が始まりました。十一月後半に行われた「アメリカ・ロサンゼルス喜びの集い」に参加中に、井上昇、公子ご夫妻と娘の純子さん一家とのお交わりが与えられました。

昇さんは、かつて総合商社で自衛隊機を含む航空機輸入を担当していたことを、嬉しそうに私に話してくださいました。その会話の様子を見ていた純子さんとも意気投合して、帰国後お互いに結婚を祈るようになりました。

ある日、純子さんから不安を打ち明けられました。その瞬間、私は主イエス様に祈り求めました。主イエス様は即座に「見えないものに目を留めなさい」と答えを与えてくださり、純子さんに「この世で心配していることは特に気にしていません。支え合うのが夫婦でしょう」と話して、結婚の祈りを続けました。結婚指輪には次のみことばの中から刻みました。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2コリント 4・18）

一九九七年八月にベックさんの司式のもと、御代田の福音センターで結婚式の恵みにあずかりました。式の直前、ベックさんと私たちは一致して「結婚式に参列してくださるまだ信仰をお持ちでない方々が、私たちの結婚式ではなく、救い主イエス様を素晴らしいと感じていただけますように」と祈りました。

宇都宮市内での生活が始まり、その年の暮れに妻の妊娠がわかりました。ある日、出産の不安でいっぱいの妻がとても心が不安定になりました。私は「支え合う」どころかイエス様に祈ることもなく、何一つ妻に対する心のケアや医療機関に連れて行くことをしませんでした。今も当時を思い出すたびに、妻に対する罪悪感でいっぱいになります。一九九八年八月、私たちに息子が与えられました。次のみことばを与えられて、息子を「強士」と名付けました。

6人の証し

Unser HERR lebt

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄雄しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。（ヨシュア　1・9）

成長していくにつれて強士は、発達の遅れが顕著になりました。発達外来の医師による診断結果は「自閉症」でした。特別支援学校に小学部から入学、高等部卒業間際に強度行動障害を発症して遠方の精神病院に数か月入院しました。退院後は病院の近くにあるグループホームに入所して生活しています。物を壊す衝動を抑制できない息子ですが、仲の良かった特別支援学校の同窓生や、私と同じ業界に進んだ従兄弟たちの救いを祈る優しい一面もあります。

すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』（マタイ　25・40）

息子の成長について、私たち夫婦が心配する必要は全くありません。息子や息子と同じ障害者、ことに社会的弱者の日々の生活は、主イエス様が全力でお守りくださっていると確信して感謝しています。

福音の場として

一九九九年十月に栃木県壬生町の交通の便の良い土地に与えられた我が家は、ベックさんが召されるまで家庭集会の場として用いられました。他の方に頼まれて家を家庭集会の場所として提供したのではありません。主が頑なな私の心を砕かれたからです。私の家は義母の公子さん宅と棟続きであったので、家庭集会の時はベックさんと未信者の方の交わりの場として公子さん宅も用いられました。

息子の発達障害を通して救われた義父の昇さんが二〇一二年五月に召された時に、ベックさんが聖書からメッセージしてくださりイエス様を中心とした葬儀が行われました。ベックさんは「愛する昇さんは天国にゴールインしてイエス様のもとで元気になっているよ、うらやましい。」と語ってくださいました。その後ベックさんも一足先に天国にゴールインしたので、愛娘のリンデさんたちと再会して喜んでいることでしょう。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ　18・20）

絶えず祈りなさい。（1テサロニケ　5・17）

大切なこと

自衛官時代に訓練で練習機に同乗していた時の話です。操縦していた訓練生が操作手順を間違えて、「その前にやることあるだろう」と教官に厳しい口調でミスを指摘されました。優先して行わなければならないことの大切さを実感しました。信仰を与えられた私たちが、日々の生活で直面する難題解決のために「その前にやること」とは、自分の考えを優先する前に主イエス様に祈り求めることです。

私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。（詩篇　16・8）

いじめや噂話は、単なる暇つぶしや退屈しのぎが最大の原因であり非常に幼稚な行為です。私たちも平安な日常が続いてイエス様への祈りと感謝を忘れてしまえば、サタンの誘惑に負けてそのようになるかもしれません。先に主の救いにあずかった私たち信者は、多くのまだ主をご存じでない方が救い主イエス様を知るように祈り、そうした方々のつまずきとならないよう言

動に気を付けなければなりません。

最高の恵みと悔い改め

恵みとまことの神を信じる信仰によって、主に祈って与えられたものはすべて最高の恵みでした。かけがえのない家族、日々の生活に必要な心強いみことば等、数えきれない恵みを与えられました。

主の御前に謙虚さを忘れて「自分は正しい」という態度をとったり、感謝を忘れてしまいがちな私ですが、悔い改めと感謝の心を忘れずに、疎遠になりがちな親戚や多くの主をご存じでないの方の救いを日々祈り続けることが出来ればと願っています。そしてキリスト集会や素晴らしい福音メッセージを語り、あるいは証しをする兄弟姉妹が有名になるのではなく、唯一の神様とイエス様だけがほめたたえられ、ご栄光をお受けになりますようにと祈り続けます。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

井上 裕之（いのうえ ひろゆき）
一九六五年二月岡山県出身、栃木県在住
巨勢小、美作中、勝間田高中退、
京都府立桃山高等学校卒業
(株)福力電機製作所、陸上自衛隊航空学校を経て
東京電力パワーグリッド（株)登録調査機関 勤務
妻　純子
息子　強士（つよし）
義母　井上 公子

イエス様との私の歩み

ウィリアム・ジャクソン



ウィリアムさん。加奈子さんと

若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。（箴言　22・6）

私は一九五七年アメリカ中西部のオハイオ州マンスフィールドで生まれました。私にはイエス・キリストを主であり救い主であると信じる姉と弟がおり、二人ともまだ健在です。私の父、母、そして異母兄姉はもうすでに主イエス様のみもと、天国に召されています。

私たち家族は初めアフリカン・メソジスト監督教会（ＡＭＥ）に集っていましたが、後にキリスト・ミッショナリー・バプテスト教会（ＣＭＢＣ）に集うようになりました。

私は六歳の時にイエス様に出会い、十二歳で洗礼を受けました。私たちの家族にとって日曜学校と教会の礼拝に出席することはどうしても外せないことでした。というのはイエス・キリストについて、イエス・キリスト

とはだれで、私たちに何をしてくださったかを知ることが大切だと、母から言い聞かされていたからです。イエス様は神の唯一の御子であること、道であり、真理であり、いのちであることを教えられ、私は今もなお信じています。ＡＭＥとＣＭＢＣ教会の礼拝は教会の教義と儀式に則り厳格に行なわれていました。私にとって教会の礼拝は友達に会いに行くところで、社交の場となり、私はイエス・キリストとの親しい個人的な関係を持つことを重要視していませんでした。

一九七五年に高校を卒業後、エンジニアリングを学ぶためにテクニカルカレッジに入学しました。それは私が、コンピューターについて学び始めた時でした。一九七八年アメリカ海軍の入隊試験に合格し、電子工学やコンピューターの操作と修理について、継続して教育を受ける機会が与えられました。その後二年間、フロリダ州にある海軍の学校で高等電子工学とコンピューターサイエンスを学び、クラス三十五名中二番で卒業しました。

一九八〇年、私はアメリカ海軍から日本に派遣され、そこで私は引き続きコンピューターに関する教育と経験を積み、海軍のコンピューター操作と修理において急速に実力を身につけ、昇進していきました。一九八一年から一九八四年の間に三度中東に配備されましたが、その間も教会の礼拝に集い、教会の聖歌隊や、日本、韓国、フィリピン、オーストラリアの孤児院で奉仕をしていました。私たちの救い主であるイエス・キリストの恵みとあわれみによって、配備中も身体的ダメージから守られました。

主イエス様との歩みの中で、イエス様は恵みによって私にたくさんの個人的な助けをくださいました。その中でも特に重要な出来事は、一九八四年に私が妻、加奈子と結婚したとき、一九八五年に妻がイエス様と出会い、イエス様を個人的な救い主として受け入れ洗礼を受けたとき、二〇〇三年に私が主イエス様に全面降伏したとき、二〇〇五年に私たち夫婦が和解したとき、

二〇一二年の母の召天のとき、二〇一五年に私が前立腺がんと診断され治療したときのことです。

私と妻はイエス様が私たちの人生と結婚の基礎となってくださることを望んでいました。私たちは海軍横須賀基地内にある教会や日本やアメリカにあるその他のいくつかの教会にも行きました。

一九八五年、妻が救われて半年後、私は海軍から自分の母校であるフロリダにある高等電子工学の学校の講師として選ばれました。しかしその同じ時期に、加奈子の父親から彼女が日本の医学部に行くことを求められました。私たちは悩みましたが、彼女の家族との和解の機会と思い日本にとどまりました。

…だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。

（マルコ　8・34、35）

一九八六年、主イエス様は私たち夫婦を祝福してくださり、加奈子は東海大学医学部に行くようになり、そこで重田定義氏と出会い、日本人クリスチャンの集まりであるキリスト集会に導かれました。キリスト集会の日曜礼拝や家庭集会に集いましたが、私は日本語がよくわからず、礼拝の祈りや福音メッセージの内容もあまりわかりませんでした。しかし、私は主であり救い主であるイエス様に信頼することで、みことばを通して信仰を成長させていただき、主イエス様がすぐ側にいてくださることで慰められました。確かに主イエス様は、主ご自身と主にある集会の兄弟姉妹たちとの生き生きした交わりの中に私たちを導いてくださっていました。

私たちは、主イエス様が真ん中におられ、イエス様を霊とまことによって礼拝する場所を見出したことに

6人の証し

Unser HERR lebt

ついに心も霊も破産状態となりゼロ地点に達しました。しかし、イエス様だけは私の友となってくださり、私をひとりにしておかれませんでした。

私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

（1テモテ　1・13〜15）

二〇〇三年、とうとう私が最低の状態になっていっさいを失った時、イエス様は私を捕えてくださいました。私はイエス様にひれ伏して「救ってください」と嘆

よって祝福されました。

その時から、キリスト集会が私たちの礼拝する場所となり、また多くの兄弟姉妹の祈りによって慰めを受けました。私たちは主イエス様を通していただいたたくさんの神様の恵みとあわれみの祝福に感謝します。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命記　31・8）

一九九七年、私は日本での仕事と生活に、また夫婦間の問題で心が痛み苦々（にがにが）しい思いになりました。私は日本で進むべき道が見えなくなり一人でアメリカに戻りました。私は妻に対してまた主イエス様に対して不忠実でした。私は妻と私の家族からも離れて、イエス様の犠牲に対してふさわしくない生活を送りました。私は

願しました。私は非常に悔いた心で主の前にへりくだり反抗的な生き方をしたことを悔い改めました。そしてイエス様に私の人生、結婚、私のすべてを明け渡しました。

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。（詩篇　34・4）

私は、イエス様に私たちの結婚、夫婦の生活をみこころのとおりに回復してくださるよう真剣に祈るようになりました。二〇〇五年、イエス様は私の祈りを聞いてくださり、私と妻はまた連絡を取るようになりました。私たちは 聖書のみことば集『日々の光』を一緒に読み、イエス様と共なる夫婦生活の回復を祈りました。

二〇〇九年、私たちが今住んでいるミシガンに妻が来て一緒に生活するようになりました。私たちの人生の中でこの問題を通して、主イエス様の尽きない愛の

確かさを知る恵みをいただいたことを感謝します。今は主イエス様との、そしてお互いの間の完全な和解も与えていただきました。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

（哀歌　3・22〜24）

二〇一二年、私の母は主イエス様の御元に召されました。母は二十年以上、ループス（全身性エリテマトーデス、略称ＳＬＥ）を患（わずら）っていました。母の最後の日曜礼拝はイースターの時で、キリスト集会の電話礼拝に一緒に参加しました。主の栄光と主イエス様を喜ぶ母の顔を見ることができました。母が召される前夜、母と一緒に聖書のみことばを読んで祈る交わりの時を主イ

6人の証し

Unser HERR lebt

エス様は祝福してくださいました。母は召される時が来たことを悟り、受け入れて、主イエス様に助けていただけるように主の御名を呼び求めました。その時、主イエス様と母は、箴言3章5～8節のみことばを通して私たちを祝福してくださいました。

私の最近の神様の恵みとあわれみの体験は、二〇一五年からの九年間にかけて起こされました。それは、私が悪性度の高い前立腺がんと診断された時に、私と妻に示してくださったあふれるばかりの神様の恵みです。このことは私たちにとって大きなショックでしたが、この知らせを受けた時、聖霊を通して次のみことばが与えられ、希望と励ましをいただきました。

イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」
（ヨハネ　11・4）

主イエス様が導いてくださるように、神様のみこころだけがなるようにと私たちは祈りました。最初の医師はすぐに手術をしてがんを取り除きたいようでしたが、その他の治療の選択肢も聞き、引き続き主イエス様にみこころの道を導いてくださいと祈りました。主イエス様がミシガン大学病院の放射線治療科に導いてくださり、その医師のチームの中にウィリアム・ジャクソンという同姓同名の医師がいることを知って驚きました。私は直ちに主の御名を賛美しほめたたえ、これが神様のみこころとわかりました。私は主イエス様に信頼し平安に治療を受けることができました。

四十二回の放射線治療の後、癌は消失しました。主イエス様が私を生かしてくださり、主のご栄光の証し人となるようにしてくださったことを、主イエス様を通して父なる神様に感謝しました。二〇二二年にがんが再発しましたが、主イエス様は追加の治療を恵んでくださり、がんは制御されています。

主イエス様はこれまでの全ての年月、私の主であり、救い主であり、私の救いの岩であることが真実であることを証明してくださいました。私のすべての痛み、苦しみ、また日常のチャレンジの中にあって、私はあらゆることにおいて主イエス様に信頼し続けます。今、私は私のいのちを主イエス様にお捧げし、イエス・キリストを信じる信仰による救いの福音を伝える主イエス様の器として私たちを用いてくださるように求め続けています。

私は主イエス様との親しい個人的な関係を通して、私の信仰の目標に達する途上にあります。依然として神様の栄光に達せず、罪を犯す者ですが、主イエス様は私を愛し、私のことを心配していてくださることを知っています。私の願いは主イエス様のために生きること、キリストの中にあることです。

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。　（ピリピ　3・12）

ウィリアム・ジャクソン
一九五七年　米国オハイオ州生まれ　米国海軍退役
メリーランド大学コンピューターサイエンス科卒
現在、テカムシ・プロダクト・カンパニー
グローバル・オラクルアプリケーション・
データベース・マネージメント勤務

妻　ジャクソン・加奈子（かなこ）

6人の証し

My Life's walk with Jesus Christ

Train a child in the way he should go, and when he is old, he will not turn from it. (Proverbs 22:6)

I was born in 1957, in the mid-west of the United States, in Mansfield, Ohio. I have an older sister and younger brother, who are still alive, and who believe in our Lord and Savior Jesus Christ. My father, mother, stepbrother, and stepsister have already gone home to be with our Lord Jesus. Our family initially attended an African Methodist Episcopal (AME) church, then later a Christ Missionary Baptist (CMBC) church. I was introduced to Jesus Christ when I was 6 years old and was baptized when I was 12 years old. Sunday school and church services were mandatory in our family, as my mother insisted that we should know about Jesus Christ, who he is and what he had done for us. I was taught and still believe that Jesus is the way, the truth, and the life, the one and only begotten son of God.

Religious services in the AME and CMBC churches are strictly organized, in the rituals and tenets of their doctrines. Church services is where I joined together with my friends, and it became a social organization, with no emphasis on having an intimate personal relationship with Jesus Christ.

After I graduated from high school in 1975, I enrolled into technical college, to learn engineering. This is when I started to learn about computers. In 1978, I took the entrance exam for the US Navy and was afforded an opportunity to further my education in electronics, computer operations and repair. For the next 2 years, I attended the Navy's Advanced Electronics and Computer Studies program in Florida and graduated number #2 of a 35-member class.

The US Navy sent me to Japan in 1980, where I continued to gain further education and experience in the computer field. I advanced rapidly in the field of naval computer operations and repair. From 1981 to 1984, I was deployed three times to the Middle East, but also attended church services, participated in the church's choir, and helped with orphanages in Japan, Korea, Philippines, and Australia. By the grace and mercy of our Lord and Savior Jesus Christ, I was protected from any physical harm during the deployments.

Our Lord Jesus Christ has blessed me with many moments of personal salvation in my walk with him. Most notably the major events have been when I was married to my wife, Kanako, in 1984, when she met and accepted Jesus Christ as her personal savior and was baptized in in 1985, when I completely surrendered myself to Jesus Christ in 2003, our marriage reconciliation in 2005, my mother's death in 2012, and my prostate cancer diagnosis and treatment in 2015.

Kanako and I had the desire that Jesus Christ should be the foundation of our life and marriage. We started going to church on the Yokosuka naval base and at other various churches in Japan and the United States. In 1985, six months after my wife was saved, the Navy selected me to become an instructor at the Advanced Electronics and Computer Studies school from which I graduated from, in Florida. But, during the same time, Kanako's father asked her to attend medical school. We were troubled with our decision, but we thought that it would be a chance to reconcile with her family, so we stayed in Japan.

…If anyone would come after me, he must deny himself and take up his cross and follow me. For whoever wants to save his life, will lose it, but whoever loses his life for me and for the gospel will save it.(Mark 8:34-35)

The Lord blessed us in 1986, after Kanako started going to medical school at Tokai University, she met Shigeta-kei and we were introduced to the Japanese Christian Fellowship – Kirisuto Shukai. We attended

Sunday services and home fellowships, but I didn't totally understand the Japanese language or the service. I trusted in our Lord and Savior Jesus Christ, grew in faith through the word of God and felt the comfort of the Lord presence. Surely the Lord was guiding us into a lively fellowship with him and with other brothers and sisters of Jesus Christ.

We were blessed to have found a place where the Lord lives and for us to worship him in spirit and in truth. Since then, Kirisuto Shukai has been our place of worship and many brothers and sister's prayers have provided much comfort to us. We are thankful for the many blessings of God's grace and his mercy through our Lord and Savior Jesus Christ.

The Lord himself goes before you and will be with you; he will never leave you nor forsake you. Do not be afraid; do not be discouraged."
(Deuteronomy 31:8)

In 1997, I became bitter with my work/life situation in Japan and our marriage had problems. I couldn't see the way forward in Japan, so I returned to the United States alone. I was unfaithful to my wife and my Lord Jesus Christ. I distanced myself from my spouse and our family, living a life unworthy of Jesus's sacrifice. I eventually became emotionally and spiritually bankrupt and went to the "zero point". Jesus became my only friend, and he would not leave me alone.

Even though I was once a blasphemer and a persecutor and a violent man, I was shown mercy because I acted in ignorance and unbelief. The grace of our Lord was poured out on me abundantly, along with the faith and love that are in Christ Jesus. Here is a trustworthy saying that deserves full acceptance: Christ Jesus came into the world to save sinners – of whom I am the worst. (1 Timothy 1:13-15)

In 2003 Jesus finally captured me, when all was lost, and I was at my lowest point. I bowed down to Jesus and pleaded with him to save me. With great remorse I humbled myself, repented of my rebellious ways and

surrendered my life, my marriage and my all to him.

I sought the Lord, and he answered me; he delivered me from all my fears. (Psalm 34:4)

I earnestly prayed for our marriage and life to be restored in accordance with God's will. My prayers were answered in 2005, Kanako and I started to communicate again. We read the "Daily Light" together and prayed for the restoration of our marriage and our life with Jesus.

In 2009, Kanako moved to Michigan where we now live. We are blessed to have been through this trouble in our lives and to know with all assurance of Jesus's unfailing love. We have now been fully reconciled with the Lord and with each other.

Because of the Lord's great love we are not consumed, for his compassions never fail. They are new every morning; great is your faithfulness. I say to myself, "The Lord is my portion; therefore I will wait for him." (Lamentations 3:22-24)

In 2012, my mother went home to be with the Lord. She had been sick with Lupus for 20 years. The last Sunday service she attended was with Kirisuto Shukai Dewa Reihai during Easter. I could see the glory and the joy of the Lord on her face. The night before her death, we were blessed to have fellowship with her by reading the bible and praying with her. She acknowledged, accepted and called out to Jesus to help her in her passing. The Lord and my mother blessed us with the following verses:

Trust in the Lord with all your heart and lean not on your own understanding; in all your ways acknowledge him and he will make your paths straight. Do not be wise in your own eyes; fear the Lord and shun evil. This will bring health to your body and nourishment to your bones. (Proverbs 3:5-8)

My most recent experience with the blessing of God's grace and mercy has occurred over the last 9 years starting in 2015. God showered his blessings upon Kanako and me when I was diagnosed with an aggressive form of prostate cancer. It was a very big shock to us. Upon receiving the news, the Holy Spirit blessed us with the below verse, which gives us hope and encouragement.

When he heard this, Jesus said, "This sickness will not end in death. No, it is for God's glory so that God's Son may be glorified through it." (John 11:4)

We prayed and asked Jesus to show us his way and that only God's will be done. The first doctor wanted to remove the cancer immediately by surgery, but we asked about different options for treatment. We went to several oncology and radiation specialists but continued to ask Jesus to show us his way. The Lord Jesus led us to a radiation specialist at the University of Michigan, and we were stunned that one of the doctors was named William Jackson. I immediately glorified and praised the Lord and knew that this was God's will. I trusted the Lord and I was able to receive my treatment in peace.

After 42 rounds of radiation therapy, the cancer was dissipated. I thank God the Father, through our Lord Jesus Christ that he allowed me to live and to be a witness for his glory. Although the cancer returned in 2022, the Lord blessed me with further treatments which has kept the cancer under control.

I continue to trust the Lord in all aspects of my life, through all the pain, sufferings, and the everyday challenges that occur, as he has proven to me over all these years, that he is my Lord and Savior, the rock of my salvation. Now, I dedicate my life to the Lord and continually ask that he utilize us as his vessel to spread the gospel of the good news of salvation that comes through faith and belief in Jesus Christ.

I am in the progress of reaching the goal of my faith, the salvation

of my soul, through an intimate and personal relationship with Jesus Christ. Though I still fall short of the glory of God and sin, I know that he loves and cares for me. My desire is to live my life for Jesus and to be found in him.

Not that I have already obtained all this, or have already been made perfect, but I press on to take hold of that for which Christ Jesus took hold of me. (Philippians 3:12)

Husbands, love your wives, just as Christ loved the church and gave himself up for her to make her holy, cleansing her by the washing with water through the word… (Ephesians 5:25)



神の愛とあわれみ

ジャクソン・加奈子



加奈子さん。ウィリアムさんと

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

私は一九六〇年佐賀県に生まれました。開業医の父、母、弟、祖母、そして看護師さんや従業員の人達が沢山いる中で育ちました。

子供の頃から漠然と「死んだらどうなるのだろう、なぜ生きているのだろう?」と思うことが度々ありました。小学校と中学校は地元の学校に通い、高校から父の勧めで交換学生としてアメリカに行きました。最初のホストファミリーは若い牧師さんのご家族で、日曜日には教会に一緒に行きましたが、牧師さんのお話は何もわかりませんでした。交換学生の期間が終わった後もアメリカに滞在し高校を卒業して、現地の大学に進学しました。

大学卒業後は日本に帰国して仕事をしていました。この頃、後に夫になるウィリアムに出会いました。彼はアメリカの海軍の仕事で日本に来ていて、自分のキャリアのためにまっしぐらに進んでいました。私たちが付き合い始めて約一年が経ち、ウィリアムから結婚のプロポーズをされました。結婚前に彼は米軍の教会に何度か連れて行ってくれましたが、その時も私には牧師さんの話は何もわかりませんでした。私の両親は付き合うのはいいけれど、結婚には反対でした。彼の母親は初め結婚に反対しましたが、息子が選んだ人ならと許してくれました。そして私たちは一九八四年に結婚しました。

イエス様との出会い

夫がアメリカから日本に来る時に、彼の母親が聖書を持って行くようにと渡してくれていました。私たちの結婚生活が始まり、夫がその聖書を読んでいるのを時々見かけました。私も読みたいと言うと、「聖書はイエス様のことが書いてあるから、イエス様に出会わないと分からないよ」と言い、彼の聖書は文語訳のキングジェームス版だったので英語が難しいからと言って、次の日に口語訳の英語の聖書を2冊買ってきてくれました。それから聖書を一緒に読むようになりました。

読み進んでいくうちに、イエス様が私の心の扉を開いてくださり、イエス様という神のひとり子がおられること、イエス様は私を愛してご自分のいのちを身代わりとして私の罪のために十字架にかかり、ご自分の身を裂き血を流して、私のすべての罪を贖(あがな)ってくださったことを知りました。そしてイエス様を信じる私たちに永遠のいのちを与えてくださったことを知りました。

イエス様は私が生まれる前から私のすべてをご存じで、神様を無視して自分勝手に生きてきて、滅びに向

が目指していた道は断たれてしまいました。当然、彼にとって自分が一生懸命に頑張ってきたことを手放すことはとてもつらいことでした。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。（イザヤ　42・16）

私が入学した東海大学医学部には、クラブ活動に「聖書を読む会」があり、その顧問の先生がキリスト集会に集われる重田定義さんでした。私は日本語の聖書をまだ持っていなかったので、重田さんが私に日本語の聖書をくださいました。私たち夫婦はそれまでいくつかの教会に行きましたが、どこも聖書が語っている教会とは違っていると思い、イエス様に「行くべき教会」を与えてくださいと祈っていました。卒業間近に重田ご夫妻のお誘いで荻窪のご自宅での家庭集会に集う機会が与えられ、そこに多くの兄弟姉妹とお交わりしていただきました。そこにいらっしゃった兄弟姉妹は、罪人（つみびと）である自分がイエス様のあわれみによって救われたということを心から喜んでおられる兄弟姉妹ばかりでした。互いに喜び合いながらイエス様を証しておられました。一九九二年から私たちは吉祥寺キリスト集会に集うように導かれました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

私たちに集うべき集会は与えられましたが、私たち双方が持っている罪の性質「自分は正しい」という頑固な自我の思いが夫婦の一致を大きく揺るがし、一九九七年に夫と別居生活になりました。

自分が正しいと思っている間は何が悪いのかわかりませんでした。そんな愚かでどこまでも自我の強い私たちに、主イエス様は働き続けてくださり、主イエス様だけが正しいお方であり、私たちの内には何ひとつ正しいものの良いものはないことを、私たちそれぞれに様々な体験を通して教えてくださいました。

兄弟姉妹と共に祈り続けているうちに、二〇〇九年、主イエス様は私たち夫婦を再建してくださいました。お互いに対して、何よりも主イエス様に対して犯した様々な罪を悔い改める機会を与えてくださいました。その後、主イエス様は私たちと家族に溢（あふ）れるばかりの恵みをくださいました。

家族のこと

私が救われた時、アメリカの義母はとても喜んでくれました。義母は五〇歳後半に難病になり、そのことを

通して、教会に儀式的にまた社交的に行くのではなく、みことばを自分のものとして喜ぶ人へと変えられていました。義母は長い間病気で苦しみ、最後は老人ホームでホスピスケアを受けました。老人ホームに入ってからは教会の方達は訪問されなくなりました。私たちが週末に行って義母の部屋からキリスト集会の電話礼拝に一緒に集い、聖餐をいただいて、福音メッセージを私がそばで英語に通訳すると、義母は本当に感謝して喜んでいました。二〇一二年四月、最後に一緒にキリスト集会の電話回線を使っての礼拝に参加した後まもなく、義母は天に召されて行きました。主イエス様の愛とあわれみを見せていただきました。

私の両親には、長い間福音に関する本を渡したり、喜びの集いに誘ったりしましたが、私に会いに来るものの福音には全く興味を示しませんでした。父は老年になり脳出血をおこしてからは、それまで人前で話したり、文章を書いたりするのがとても得意だったのに全く出来なくなり、とても落ち込んでしまいました。父は私たちが実家に帰ると食事の前に、「祈って」と言うようになり、最後に「アーメン」と言うようになりました。その後父の具合が悪くなったと知らせがあり父の病室を訪ねました。父はほぼ意識もない状態でしたが、ベッドサイドで賛美をしたり、聖書のみことばを読んだりして声を出して祈っていました。母と姪が病室に入って来てそれを静かに聞いていました。父の顔を見ると涙が流れていました。

二〇一七年、父は八十六歳で召されました。後にわかったことですが、ずっと前に渡していた聖書が見つかり、そこにはキリスト集会のメサイヤのコンサートのパンフレットが挟んであって、いくつかのみことばの箇所に横線が引かれていました。

葬儀は仏式でしたが、葬儀場で式の前に流す音楽を弟が私に託してくれたので、『日々の歌』の賛美のCDを渡して、葬儀場の方がその中から選んで何曲か流してくださいました。最後に流れた曲が日々の歌二十六番で「小羊は勝利された。ゴルゴタで十字架につき、尊い血をば流したもう。私たちも贖われて、赦された罪をば。救いは完了した」と葬儀場に響き渡りました。また葬儀の来客の方々に福音を伝える『高齢者の幸せのために』(重田定義氏著)をお渡しすることを母も弟も心よく了承してくれたので、お通夜と葬儀を合わせて三百人近くの方々がみことばを持ってお帰りになりました。すべて主イエス様がなさってくださいました。佐賀県の小さな町の人々にも、主イエス様が救いの良き知らせを伝えてくださいました。

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。

そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。

(イザヤ　55・9〜11)

理解を遥かに越えた主イエス様の愛と御力の凄さに圧倒されるばかりです。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

こういうわけですから、このことばをもって互いに慰

6人の証し

Unser HERR lebt

め合いなさい。　（1テサロニケ　4・16〜18）

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ　3・20、21）

私たち夫婦は、現在アメリカ、ミシガン州に住んでいます。北米・ヨーロッパに住むキリスト集会の兄弟姉妹と毎週、電話回線を通じて日曜礼拝の時が与えられています。そして、コロナ禍になって町田キリスト集会の礼拝にも「ズーム」でこちらの土曜日の夜に集わせていただくようになりました。

主イエス様のからだなる教会の一部分としていただいて、兄弟姉妹とのお交わり、お祈りの輪に入れていただいている恵みに心より感謝します。兄弟姉妹のお祈りを心より感謝します。

ジャクソン・加奈子（かなこ）
一九六〇年　佐賀県生まれ
ニューヨーク州イサカ大学心理学科卒、
東海大学医学部卒
東海大学医学部付属病院リウマチ・膠原病内科、
茅ヶ崎新北陵病院内科勤務
現在、ミシガン大学病院医療通訳サービス勤務
夫　ウィリアム・ジャクソン

主イエス様のなさったこと

ゴットホルド・ベック

この世に生きる私たちにとって、最も大切なのは「主イエス様のなさったこと」、その事実ではないでしょうか。その意味で、聖書と普通の宗教の言っていることとは逆です。宗教は、「人間が、何をなすべきか、何を信じるべきか」を教えますが、聖書は、「イエス様が、どうしようもない人間のために何をなさったか」が中心テーマです。

イエス様は大いなることをなさいました。イエス様が地上生涯において何をなさったかを知りたいと思えば、四つの福音書を読むべきです。それぞれの福音書の中に、私たちは主イエス様のすばらしいお姿を見ることができます。特にヨハネの福音書においては、「神の御子」としてイエス様の「神性」が読者に分かるように紹介されています。私たちが「主よ。どうか私の心の目を開いてください」と祈りながら福音書を読むと、驚くことになるでしょう。イエス様のご人格と、そのみわざが、私たちに明らかにされるようになるのです。

実際にヨハネの福音書11章に記されているイエス様は、何をなさったのでしょうか。要約すれば次の四つです。第一に、人々は助けを求めましたが、イエス様は意識的に遅れて行かれました。しかし、その遅過ぎたのが「最善の時」でした。第二に、マルタとマリヤと苦しみを共になさいました。第三に、一人の信者が死ぬときに起こる事がらを明らかにしてくださいました。第四に、霊、

主イエス様のなさったこと

たましい、からだが再び一つにされることによって、ご自身の力を現わされたのです。

1. 最善の時にことをなされる

11章45節にはこうあります。「そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた」。その様子を想像してみましょう。イエス様には、三人の特別に親しい友、マルタ、マリヤ、ラザロがいました。この三人の家にイエス様は何度も泊まったり、交わったりなさいました。そのラザロが病気になり容態が悪化したので、彼の姉妹たちはイエス様に助けを求めるため、使いを走らせました。

イエス様はその緊急の知らせを聞いて、即座に友だちを助けるために出かけられたのでしょうか。いいえ、イエス様は私たちが全く理解できない行動をとられました。すぐには出発しようとなさらなかったのです。なぜなら、イエス様は自分勝手に行動するのではなく、その知らせを聞いたとき、すぐに御父に祈られたのです。そしてこう言われました。

> イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」
>
> （ヨハネ　11・4）

つまりラザロの病気は治らず、ラザロは死にます。でも「死」は終りではないとイエス様はおっしゃいました。この時点でイエス様は、意識的に遅れて行くことになさいました。イエス様は何をするべきかを父に明らかにしていただいていたからです。そして同じ所に二日とどまられた後、「もう一度ユダヤに行こう。」（7節）と弟子たちに言われました。

イエス様は、ラザロのもとへ全く意識的に遅れて到着されました。このようなことは、こんにちもなお、なさるのではないでしょうか。その時、私たちは「なぜ主はそうなさったのか」と問わざるを得なくなります。

しかし、ここで11章に記されている七つの事がらに注目するなら、その疑問に答える助けとなるはずです。

まず、5節に「イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。」とあります。言うまでもなく、主の愛は人間の愛とは違う性質をもっているものです。イエス様の愛は、すべてを人間が理解したり把握したりすることはできませんが、経験することができます。マルタもマリヤも、この愛を経験し、体験し、認識しました。そして彼女たちの生活はそれによって非常に豊かにされました。イエス様は私たちをも愛しておられます。

次に、イエス様は彼女たちの大変な苦しみをご存じでした。イエス様はもちろんラザロが死に瀕しているその情報を知らされていました。おそらく、すでに御父から知らせをもらっていたのではないでしょうか。イエス様は、絶望的で重大な状態を知っておられたのです。イエス様には知られていない事がらは何一つありません。私たちはしばしば、イエス様が私たちに無関心なように思いがちです。けれども、イエス様によって愛されているということ、主が私たちをよくご存じであられるということを忘れてはなりません。

しかし、イエス様はラザロの死を阻もうとはなさいませんでした。マリヤは、遅れてきた主の足もとにひれ伏して「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」（32節）と言って泣きました。もちろんそのとおりです。いのちそのものであるイエス様にとって、死を免れさせることは大したことではなかったでしょう。ラザロが癒されるためには、遠くから一言おっしゃるだけで十分だったはずです。しかしこの時、主はそのことをなさいませんでした。

確かに、イエス様は、ご自分の友であるラザロの死を、いったんは望まれたのです。ユダヤ人たちの中には、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか。」（37節）と言う者もいました。他の人を助けられたイエス様がなぜ、ラザロをお助けにならなかったのでしょうか。それがいったい愛なのでしょうか。

主イエス様のなさったこと

イエス様は出発せずに、二日間同じところにとどまっておられました。「それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。」(17節)葬儀も全て終わってしまい、ラザロの屍(しかばね)は四日間、墓の中でした。そして、最善の時がきて、イエス様は関与なさいました。墓の前で御父に感謝の祈りを捧げたのち、イエス様は既に死んで四日も過ぎている墓の中のラザロに呼びかけました。

そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」（ヨハネ　11・43、44）

イエス様は確信をもって、大きな声で叫ばれたのです。イエス様が叫ぶと、死者もそれを聞きます。イエス様が命令なさると、何かが必ず起こります。そのとき死も無力さを認め、死んでいたラザロがよみがえったのです。

このようにして、姉妹たちがイエス様から受け取ることになったのは、彼女たちが祈り求めたことよりもはるかによいものでした。墓の石を取り除けるように命じられたとき、マルタは疑っていましたが、すぐに神の栄光を見せられました。

彼女たちは、ただ単に病気の癒しだけではなく、神の栄光を見たのです。

これまで考えてきたこの七つの真理は、私たち全ての者にも当てはまるのではないでしょうか。

イエス様は、必ずしも私たちが考えるようには答えてくださいません。意識的にイエス様は私たちを、苦しみを通して訓練なさいます。そのとき、私たちは困難なことを体験することもあるでしょう。しかし、私たちの目に何も変わらないように思えても、イエス様ご自身が「主の時」に答えてくださいます。その「主の時」は、「最善の時」です。イエス様は「主の時」が来れば、関与なさいます。悪魔によって惑わされないようにしましょう。

イエス様は理解できないことをたくさん許しておられます。私たちはそれによって苦しみに陥ります。私たちは「なぜ」という疑問を持つようになり、わけがわからなくなることがあります。それは確かに厳しい試練のときです。しかし、まさにそれを通して、主のご栄光が明らかにされるようになります。ですから、前もって主はこうおっしゃいました。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」(4節)と。

もう一つ大事なことは、主は主に属する者の信仰を試し、増し加えるために理解しがたいことをお許しになるということです。苦しみがなければ成長もありません。私たちは苦しみに陥らなければ、真剣に主の方に向くことがありません。私たちの上に何の重荷も置かれなければ、私たちは主の約束にしがみつくことをしません。イエス様は弟子たちに「わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。」(15節)とおっしゃったのです。これもまた、なぜイエス様がすぐに関与なさらず、私たちが一人にさせられるかの理由なのです。

しかし、私たちは次のことを忘れてはなりません。主のご栄光はやがて明らかにされます。そして私たちは、主の最善の時を待つことによって、主に、よりいっそう近づけられ、信仰が強められるようになるということを。

主イエス様のなさったこと

2. 苦しみをともにしてくださる

しばしば私たちは、イエス様が何も配慮してくださらないように思えたり、祈りは応えられずに、そのままの状態で過ぎてしまうように思うことがあります。けれども、一つのことは明らかです。主は、あらゆる人のことを心にかけておられます。主にとって、関心のない人は一人もいません。

マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに。」そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。

（ヨハネ　11・32～35）

ここの35節「イエスは涙を流された」は聖書で最も短い節です。イエス様は、ご自身に属する人たちの苦しみ、悩み、悲しみと一体となってくださるのです。私たちは、決して誘惑や患難の中に、一人で捨てられることはありません。聖書は言っています。

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

（ヘブル　4・15）

イエス様は私たちのことを理解しておられます。主イエス様が地上で生活なさっていたときに、イエス様は多くの悩み苦しみを経験されました。ですから全く孤独であること、誰からも理解されないことが、どういうことかもご存じです。次のみことばを見ましょう。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

（1テモテ　2・5）

ここには「神としてのイエス・キリスト」とは書いてありません。「人としてのキリスト・イエス」と書かれています。人間になることによってのみ、イエス様は私たちの代わりに罰せられ、救いの道を開くことがお出来になったのです。この主イエス様は、「神であり人間」であり、そしてまた「人間であり神」であるのです。その神性において、イエス様は主権者であり、全能であられ、栄光に満ちたお方でした。人性においては、イエス様は恵み深いお方であり、赦してくださるお方であり、理解してくださり、こころ優しいお方です。イザヤ書63章9節にはこうあります。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、…」。私たちは苦しみや苦痛を経験するとき、決して自分一人だけにはさせられません。主にとって私たちは大切な存在です。主は、ただ私たちの最善だけを考えておられます。それですから、イエス様は私たちにとって困難なことも経験させるのです。しかし、イエス様は共に悩んでくださいます。私たちがあえて私たちの全ての苦しみを主に申し上げるならば、主が共に苦しんでくださり、私たちのことを心配してくださり、主の最善の時に恵みの奇蹟をなしてくださいます。そのことを私たちは経験するに違いありません。

主イエス様のなさったこと

3. 信じる者が死ぬときに起こる出来事を明らかにした

イエス様は、一人の信者が死ぬときに何が起こるかを明らかになさいました。ラザロは死にました。「そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。『ラザロは死んだのです。』」（14節）ラザロの葬りも済んで遅すぎて来られたイエス様に、マルタはもはや奇蹟を信じることができませんでした。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」と言いました。つまりラザロの死体はすでに腐り始めていました。しかし、イエス様が出発する時に次のようにおっしゃっていたことに、注目したいと思います。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」（ヨハネ11・11後半）

つまりイエス様は、信者の死が、「眠っているのと同様である」とおっしゃるのです。私たちは夜、疲れ果て

たからだをベッドに横たえて寝ます。眠りは回復と力の結集のために必要です。それと同じように、救われた者が死ぬと、からだそのものはよみがえりのときまで眠ると聖書は語っています。からだは眠りますが、霊はイエス様のみもとに行きます。

そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。（2コリント　5・6）

つまり、生きている間は、ある意味で「主から離れている」ということです。さらに次のみことばには、「死ぬ」こと、すなわち霊が「肉体を離れる」こととは、「主のみもとにいる」ことであると、はっきり書かれています

私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。（2コリント　5・8）

初代教会の最初の殉教者はステパノという男でした。彼は石で打ち殺されるのですが、その時に彼が祈った「主イエスよ。私の霊をお受けください」という祈りはもちろん聞き届けられたのです。一方、からだのほうは、将来よみがえらされるために「眠り」につきました。そのことについて、パウロはテサロニケ人への第一の手紙4章で述べています。

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。（1テサロニケ　4・13）

「眠った人々」とは、死んだ人々です。この世に望みのない人々はたくさんいます。イエス様を知らなければ、みなそうなのです。

私たちはイエスが死んで復活されたことを信じていま

す。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。…

…キリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（1テサロニケ　4・14、16、17）

むなしく望みのない人々に、「私たちは、いつまでも主とともにいることになる」と言えるのです。これは考えられない栄光です。

しかしそう聞いても、「どうして、からだが墓の中で何年もたってからよみがえることができるのか。本当に肉体の復活は存在するのか」と問う人もいるかもしれません。イエス様は私たち人間のために何をなさったのか、今や、この質問に答える最後の点にやって来ています。

主イエス様のなさったこと

4．イエス様は、霊、たましい、からだが再び一つにされることにより、ご自身の力を現わされた

ラザロのからだがすでに腐り始めてからでさえ、彼の霊、たましい、からだは一つになりました。ラザロは、すでに四日間も墓の中にいましたから、マルタは「主よ。もう臭くなっておりましょう」と言いました。ここでは確かに、奇蹟が必要でした。死んだからだにいのちを与えるだけではなく、もうすでに腐ってしまったからだそのものが新しくされなければならなかったのです。ラザロをよみがえらせ、彼のからだを新しくすることは可能なのでしょうか。「そして、イエスは…大声で叫ばれた。『ラザロよ。出て来なさい。』すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。」（11・43～44前半）とあります。ラザロは生き生きとして、健康体で墓から出て来ました。まさに同じことを、すでに死んだ全ての信者が経験するに違いありません。もちろん、それは「古いからだ」ではなく、完全に「新しいからだ」です。

ピリピ人への手紙の中で、パウロはこの事実について次のように書き記したのです。「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです」(ピリピ3・21)。ラザロはよみがえらせていただきましたが、しかしその後で、再び墓の中に入らなければなりませんでした。彼は重い病気となり、死ぬまで多くの苦痛を耐えなければならなかったかもしれません。けれども、私たちがいただく「新しいからだ」は、もはや病気に服従しません。それは「栄光のからだ」となるのです。この事実がコリント人への第一の手紙15章に書かれています。いわゆる「よみがえりの書」と言われている箇所です。

ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。

（1コリント　15・35〜38）

死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、…血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

（1コリント　15・42、44）

しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

（1コリント　15・54〜57）

これは、初代教会の絶えることのない喜びの根拠でした。11章45節にはこう記されています。「そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた」。私たちの場合はどうでしょうか。本当に心からイエス様を信じ、イエス様に信頼しているのでしょうか。イエス様は、その愛において、理解することにおいて、また赦しにおいて、唯一無比のお方です。私たちはもっと主に信頼すべきではないでしょうか。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」(ローマ8・28)と初代教会の人々は確信していたのです。すべては、すべてです。

イエス様はペテロに次のように言われました。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります」(ヨハネ13・7)。イエス様は一つのご計画を持っておられ、このご計画に沿って活動なさいます。私たちには多くのことが隠されています。私たちは暗闇の中を手探りしている者です。主のご計画は、私たちの生活の中でいかに実現されるのでしょうか。それは、イエス様がすぐには関与なさらないことによって、私たちが失望させられることによってです。また、イエス様がいちいち説明なさらずに、私たちの上に困難をお与えになることによってです。やがて私たちはみな、経験することでしょう。主のなさることは、私たちのために常に良く、常に主の御名の栄光を拝させていただく結果となる、ということを。困難なこと、理解しがたいことを通して、私たちは次のように告白するようになるはずです。

その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。

（1サムエル　3・18後半）

主イエス様のなさったこと

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

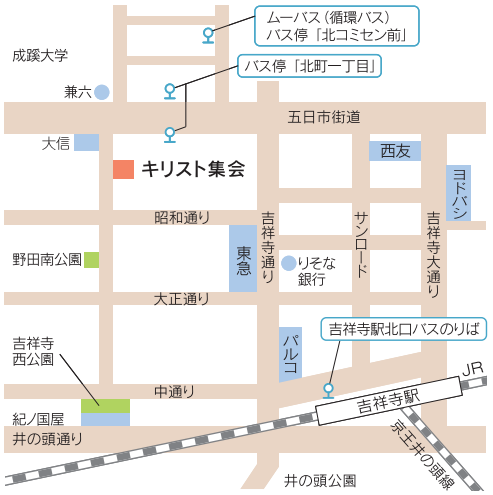
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

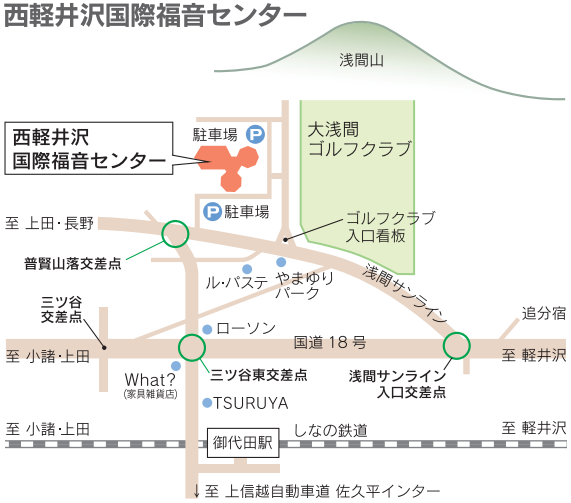
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第64号

定価100円（税込み）2024年9月8日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
写真	鈴木力
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/
出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net
また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。